

# 婦人止學毛



第一號 第二卷

# 謹告

本誌は、婦人教育及家庭教育、其他緊要なる各種の問題に關して、讀者相互の質疑應答を掲載す、但讀者の應答なき時は、記者之に應ずるものとす。

本誌は一般讀者の寄稿を歓迎す。殊に家庭の日誌、各地に於ける婦人教育幼兒保育の狀態、婦人問題、婦人兒童の遊戲、手毬歌、子守歌等に付きては、詳細なる報告を望む。但質疑投稿は、凡べて左の規則によることとす。

- 一、用紙は、白紙二つ折、字詰は、半枚十行廿二字詰、體は楷書振假名附のこと。
- 一、一事項毎に別紙を用ひ、別口に住所氏名を記入せらるべきこと。
- 一、原稿は、一切返附せざること。
- 一、封書の表には、凡て婦人と子ども投稿と明記せらるべし。
- 一、投稿にして、有益と認めたる時は相當の謝意を表することあるべし。
- 一、照回は往復はがき又は返信用切手封入のこと。

發行 毎月一回五日發行○第一卷第一號明治廿四年一月二十日發行

定價 一冊金拾錢○六冊前金五拾七錢○拾貳冊前金壹圓拾錢○郵税各一冊一錢○切手代用は壹割増但壹錢切手に限る。

入會者 是會則御承知の上にて東京女子高等師範學校附屬幼稚園内フレーベル會あて申し込まれば雜誌は無代價にて送呈すべし

購讀者 是總べて前金にて東京日本橋區本石町三丁目二十三番地金昌堂へ御注文のこと○送金は神田今川橋又は日本橋室町郵便取扱所受取入金昌堂あてのこと○見本は切手二錢に限る十二枚封入にて申し越されたし○前金相切候節は赤にて御印を御姓名の上へ附し候に付き早速御送附されたく御入用なき時は御斷り下されたく候○轉居の節は新窓共に御通知を乞ふ

編輯 是に關する御照會及原稿御寄贈はすべてフレーベル會あてのこと

廣告料 一百十圓半頁五圓

明治三十五年一月二日印刷  
同 年一月五日發行

不許複製

發行所 東京市本郷區元町二丁目六十六番地  
編輯者 東京市神田區錦町一丁目十九番地  
印刷者 東京市神田區錦町三丁目二十五番地  
印刷所 女子高等師範學校附屬幼稚園内  
發行所 東京市日本橋區本石町三丁目廿三番地  
發賣所 東京市日本橋區本石町三丁目廿三番地

大賣捌所 東京東京堂●同東海信文合資會社●同北陸館

讀しめて新年を祝し併せて

會員

諸君諸姉

讀者

の萬福を祈る

明治三十五年一月元旦

婦人と子ども編輯員

各地方通信員を求む

但し通信員には毎號本誌一冊

つづを進呈すべし

本誌原稿一切毎月十三日

フレイベル會規則

- 第一條 本會ハ幼児保育ノ改良發達ヲ圖ルヲ以テ目的トス
- 第二條 本會ハフレイベル會ト稱シ東京ニ置ク
- 第三條 會員タルラントスルモノハ幼稚園ニ關係アルモノ又ハ幼児保育ニ篤志ナルモノニシテ會員ノ紹介ヲ經ベシ
- 第四條 會員ハ本會ノ經費トシテ一ヶ月金拾錢ヲ獻出スベシ
- 第五條 令聞名望アル人ニシテ本會ノ事業ニ裨益アリト認ムルモノハ特ニ請ヒテ客員トナスコトアルベシ
- 第六條 本會ノ目的ヲ達センガ爲ニ左ノ事業ヲ行フ、
  - 一 總會 毎年四月二十一日之ヲ開キ保育ニ關スル演說、談話、保育參考品幼兒成績物展覽會、會務ノ報告、幹事ノ選舉等ヲナス
  - 一 常會 毎年二月、六月、十月、十二月ノ第一土曜日之ヲ開キ保育ニ關スル演說、談話、協議、實驗等ヲナス
  - 一 組合會 會員中特ニ或ル事項ヲ研究セントスル者ヲ以テ組織ス但シ別ニ組合會規約ヲ定メテ會長ノ承認ヲ經ルモノトス
  - 一 雜誌發行 毎月一回雜誌ヲ刊行シ之ヲ會員ニ配布ス
  - 一 前項ノ外本會ノ目的ニ裨益アリト認メタル事件
- 第七條 本會ニ左ノ役員ヲ置ク
  - 會長 一人 會務ヲ總理ス
  - 幹事 十人 會長ヲ補佐シテ會務ヲ掌理ス
  - 評議員 若干人 會長ノ指揮ヲ受ケ會務ヲ分掌ス
  - 重要ナル事件ニ關シ會長ノ諮詢ニ應ス
  - 會長ハ客員中ヨリ推薦スルモノトス
- 第八條 會長ハ會長ノ特選トス
- 第九條 幹事ハ會員ノ互選トシ其任期ヲ二ケ年トス
- 第十條 但シ毎年半数ヲ改選スルモノトス
- 第十一條 評議員ハ會長ノ特選トス
- 第十二條 本會ハ必要ニ應シ特ニ委員ヲ設ケ又ハ書記ヲ雇入ルコトアルベシ
- 第十三條 此規則ハ會員三分ノ二以上ノ同意ヲ得ルニアラサレハ變更スルコトヲ得ス

# 野田瀧三郎氏案 梶田半古氏案

美麗箱入

定價 錢



● いろはだとへ

全一冊  
定價 錢

## 發兌

東京  
本所

## 金港堂

書籍  
株式

## 會社

おめでたう!!! .....

甲「君！僕の宅へ来たまへアノ金港堂の

『歌がるた』をして遊ばうじやないか

乙「ウ、行かう

甲「金港堂の『歌がるた』はやさしくて面

白しよ.....

『いろはだとへ』といふ仕方の本も附い

てありますよ.....どここの本屋でも

賣つて居ますよ君も買給へ.....

婦人と子ども第二卷第一號目次

卷首

臺灣神社、臺灣女學校生徒遊戯、近江八景

子ども

黒子太郎、かむめの唱歌、同戶外遊戯、室内手遊(摺み方)天狗の面、一口話、謎々、考へもの

家庭

子供と天然……………安井哲子  
親馬鹿といふをよみて……………林ふみ子  
今昔いろは料理……………石井泰次郎  
傳染病……………醫學士 成瀬復三郎

學術

虎のはなし……………佐藤禮介

講義

兒童研究法……………文學士 松本孝次郎

史傳

津崎矩子……………下村三四吉  
ウキクトリア陛下……………鄭越生

文苑

門松の説……………布二の舎  
故郷と都……………鷺水

新年梅……………不盡廼舎  
正月……………同  
二見が浦……………東条  
七福神……………小林恆子  
和歌……………新年五百外……………佐々木信綱  
俳句……………愛櫻 外

説林

女子教育につきて……………嘉納治五郎  
ニエー、イングラントの一家庭……………松本亦太郎  
娛樂の撰擇……………佐方 鎮子

寄書

お正月の子ども……………西武  
秋田市正月の名物……………河井なかも  
我が地方の毬歌……………相模高座 平岩繁子  
質問題……………岐阜縣 田口由之助

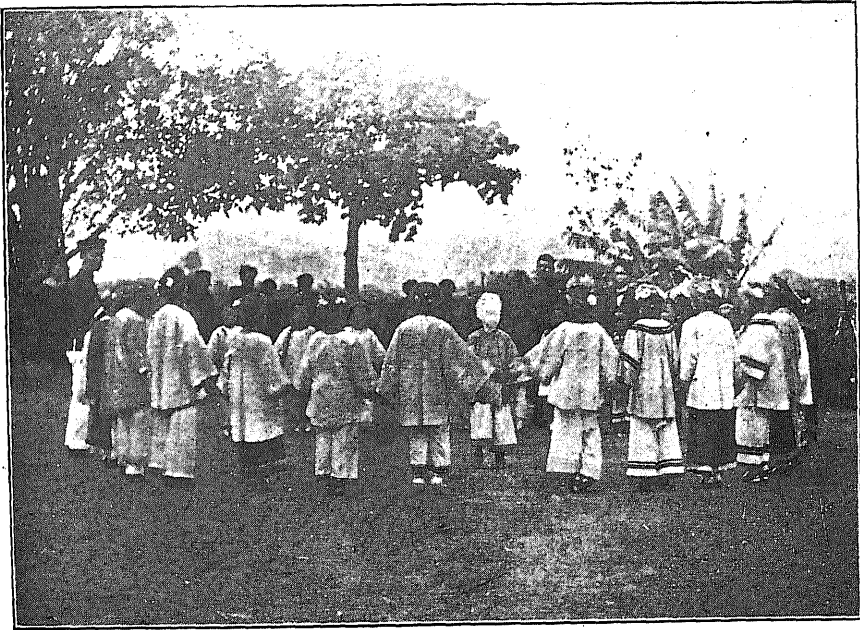
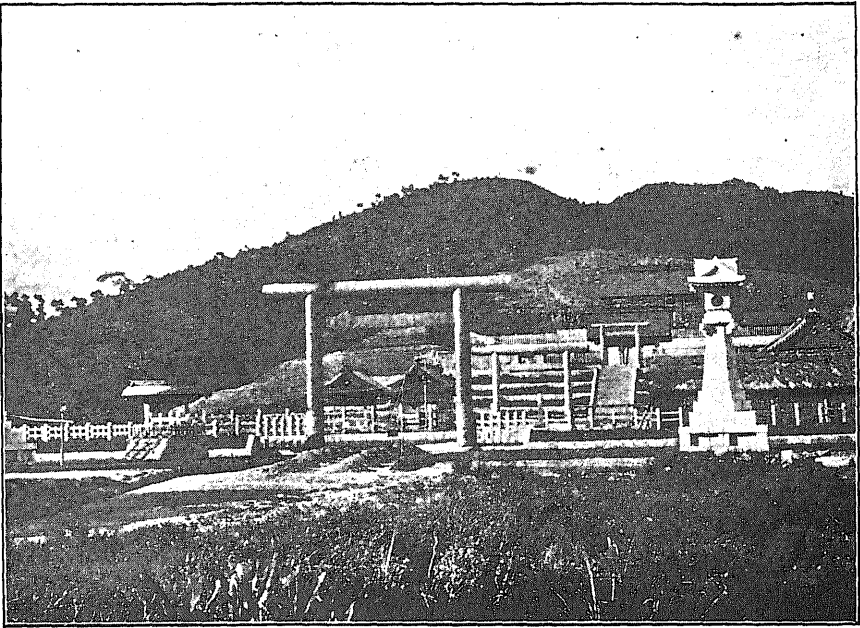
雜錄

一月の天地……………川口孫次郎  
かるたの秘訣……………鷺水  
正月の飾物と飲食物……………せ、  
和歌の浦案内……………和歌 生子

彙報

學事集會、筆の雫、外國彙報、會報

社 神 灣 臺

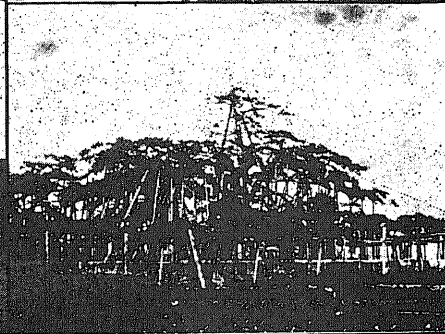
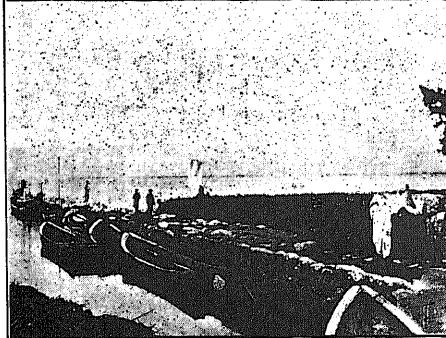
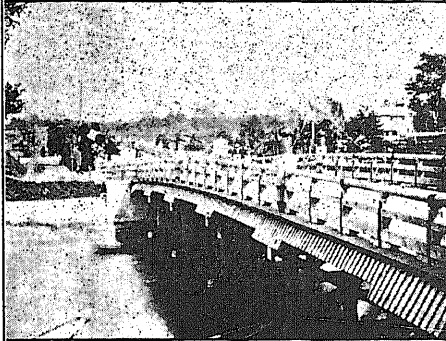


臺 灣 女 學 校 生 徒 遊 戲

# 近江八景

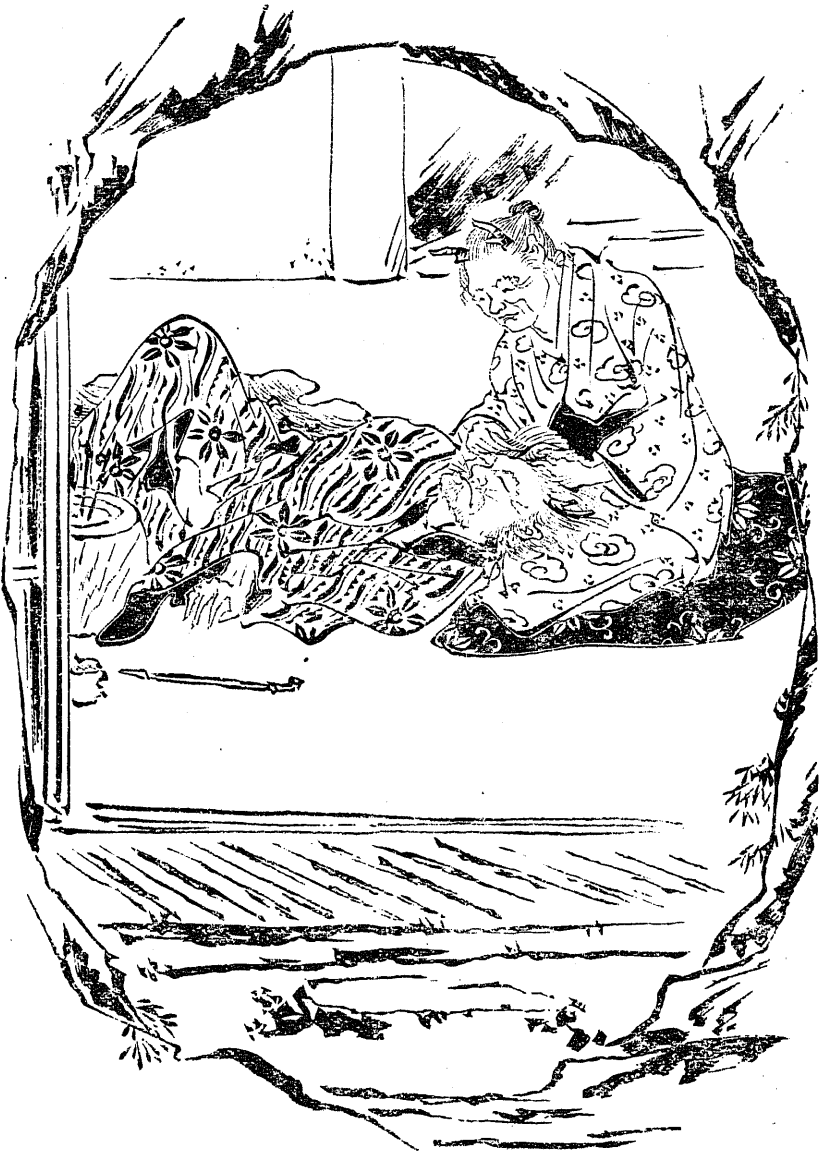
(寺 山 石)  
(田 勢)

(寺 井 三)  
(田 堅)



(橋 矢)  
(長 比)

(津 粟)  
(崎 唐)





婦人と子ども

第二卷第一號

(明治三十五年一月五日)



(本欄は凡て  
轉載を禁ず)

黒子太郎 (ついで)

やまとの翁

さて其日そのひもくれて、夕方ゆふがたになりますと、どこからとなく鬼おにの大將たいしやうが、ふいと戻もどって來きました。そしてそこいらを嗅かぎ廻まわして見たみた「あゝ、人臭ひとくさい、人臭ひとくさいこれわ變へんだ」といってしきりに隅々すみすみを探さがし始はじめま

した。けれども何も見付けだす事ができない。すると  
 鬼の婆さんが態と怒った顔附をして。

「驚何だつて此人わ、折角私が片付けて置いたのを  
 こんなに引き散らすのだもの、お前の鼻の尖にわ、  
 何時でも人間の肉が、くっついてるのだと見えるよ。

「まーそこえ坐つて夕御飯でもお上りよ」

そこで鬼の大將わ夕飯を喰べて、夫がすむとだ  
 んく眠たくなって来ました。それでお婆さんわ  
 大將の大きな頭を自分の膝の上え載せさせてちよい  
 と髪を解きつけてやるトといいます。大將わ一心

地ちになつて 婆ばいさんの膝ひざを枕まくらにして こくりく眠ねむ  
 りかけました。 婆ばいさんわ とくと夫それを見て 突いき然なり大たい  
 將しやうの頭うたまから 一ほん本の金きんの毛けを引ひき抜ぬいて 自じ分ぶんの側そば  
 え置おきました。

大將たいしやうあ痛いた！ 何なにをするのだしう？

婆ばい私わたしわねー 今いま何なんだか變へんな夢ゆめを見みたのだよ それ  
 で お前まへさんの髪かみの毛け一ほん本ほん引ひき抜ぬいたのさ』

大將たいしやうフーン どんな夢ゆめを見みたとゆーのだえ』

婆ばいまーお聞ききよ。 ある町まちにねー お酒さけの涌わきでる  
 河かわがあつた所ところが いつからとなく、 とまってしまつ

て、今でわ水一滴も流れてこない様になつたとゆー  
 のだが、一体どーした譯だろー お前知ってるなら  
 いって見てくれないかえ』

大將は「夫かい 夫わこーなのさ 一疋の蛙が河の  
 石の下に座って居るのだ。だから誰でも 其蛙を殺  
 してしまひさえすれば もとの通りにお酒が涌き出  
 るとゆー譯なのだ』

そこで鬼の婆さんわ 又以前の通り 大將の頭を  
 解き付けて居ます。心地がよいもんだから 大將わ  
 又眠り始めて 其窟の大きなことゝいったら 丸で

お座敷中の障子などが　ふるくと動き出した位で  
 す。夫を見すまして　婆さんわ　突然又二本目の髪  
 毛をひきぬきました。鬼わ不圖目を睜まして

大將「えー　うるさいなー　何をするのだ」

婆「まーそー怒んなさんな　私わ夢を見てしたのだ

もの」

大將「こんどわ　どんな夢を見たの？」

婆「こんどのわ妙なのよ　ある賑な町にねー　大き

な林檎の樹があつて　始わ黄金の實がなつていたの  
 が　近頃わ葉一枚も出ないとゆーのだが　何故だろ

「かねー」

大將ふーん 木の根の處に 鼠が居って齧ってるの  
 だよ 鼠さんに殺してしまへば 又々黄金の實がなる  
 のさ 殺さんければ枯れてしまうまで 鼠が齧って  
 居る譯なのだ。 けれども まーくゆっくりねさせ  
 て呉れ でないと今度邪魔すると婆さんだといつて  
 聞かないよ」

所で婆さんわ 又前の通り大將を寝かせながら  
 又不意に三本目の毛を抜いた。そこで今度わ 大將  
 ひどく怒って いきなり立ち上って 婆さんを抛り

附つけよーとしかけたのでしたが 婆ばさんわ まーく

といつて之これを宥なだめて

婆ばだってお前まへの外ほかに 誰たれが夢ゆめを解といてくれるもの

かい」?

大將たいしょうも やっぱり其夢そのゆめを知しりたいものだから

大將たいしょうじやー こんどの夢ゆめわ」?

婆ばまー ー ー だよ 一人ひとりの渡わたし守もりが居ゐって ど

ーゆー譯わけか 年ねんから年ねん中ちゆう 向むかの岸きしから こっちの岸きし

に 往いつたり來きたりして居ゐって どーしても離はなれる

ことが出で來きないとゆーのだが 一たい体たいどーしたらいー

のだろーと云ー譯さ『

大將「なんだ馬鹿なこと 誰か一人其處を渡る人が

あつた時に 渡し守りが 楫を其人の手に 渡して

しまいさねすれば こんどからわ其人があつちね

行き こつちに行きせねばならぬ様になつて 渡し

守りわ すぐ助かるとゆー譯なんだ』

そこで婆さんわ 黒子太郎の爲に 三本の金の毛

を抜いて仕舞つたし 又三つの事の答も大將から

聞いたもんですから 今度わ じつと大將を寝かせ

ました。 夫で大將わ 何も知らないで ぐつと朝ま



で寝こんでしまいました。

借夜が明けるとゆーと例の様に大將わどこにか  
出懸てしまったので婆さんわさっそく着物もののす  
そから蟻あひをつまみだして又もとの人の形かたちに取り代  
ねました。

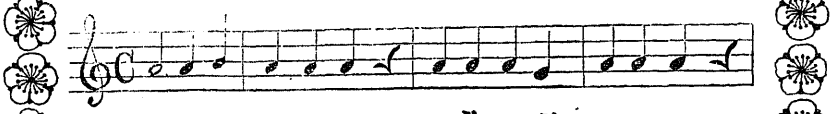
婆ば「そら黒子太郎くろごろうやこゝにお前まへの欲ほしがった大  
將しょうの金きんの毛けが三本出来さんぽんましたよ夫それからあの三  
つみつの譯わけとゆーのわ丁度ちやうどお前まへもきーて居ゐつたるよ」

太郎たろう「あーよく聞きいて居ゐました危あやまい所ところをお助たすけ下くだ  
さって其上そのうへ私わたしの望のぞみをみんな叶かなへて下くださつた御恩ごん

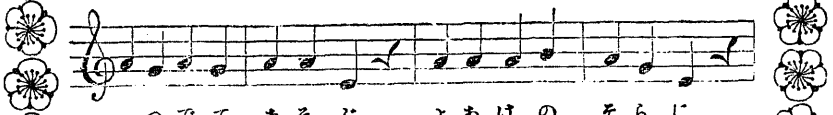
は 決して忘れわ致しません

それで黒子太郎 婆さんに大變禮をいって彼の  
 三本の金の毛を 錦の袋に丁寧に仕舞って 大事に  
 大事に懐に入れ さて鬼の棲家を立出て 何事も  
 都合よく甘く行けば行くものだなー など、考にな  
 から 大勇で以て 又元の道を通って お城に目出  
 たく歸ろーとゆーのですが 夫から途中でどんなこと  
 があるか お城に歸ってから後がどーなるのか そ  
 れわこの次のお樂にしまっておきましたよー (つづく)

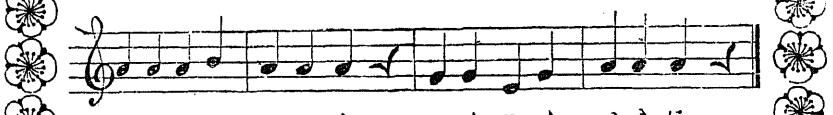
めごか



かごめ かごめ かのの とりわ



いつで あそぶ よあけの そらに



あさひの ひかり かがやく ときに

かごめ かごめ  
 かのの なかの とりは  
 いつで あそぶ  
 よあけの そらに  
 あさひの ひかり  
 かがやく ときに



### 戸外遊嬉

かごめ遊び

右にかきましたのは皆さんが、よくごぞんじの、かごめのうたを、少しかえたのです、うたつてごらんなさい、ちぎに、うたえます。

又歌が覺えられましたら、遊嬉をしてごらんなさい、その仕方わ、先の大勢で手を引いて輪を造り、輪が出来ましたら、その中から二三人、又は四五人出て鳥になり、輪のまん中にかいんで、眼をふさいでねたまねをして居るのです、まわりの輪わ、籠になつて、かごめかごめをうたいながらまわり、その歌が、おしまいになると、中の鳥は起き出して、鳥のなきごえをまね、手をはねのよゝに動かして、まわりの者につかまるのです、とまられた者わ、かわつて次の鳥になるのです。

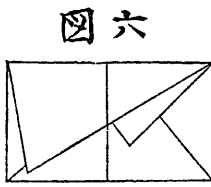
此鳥は雀とか、鶏とかきめておいてもよし、又なつた人の勝手にしても、よろしうございます。

### 室内手遊

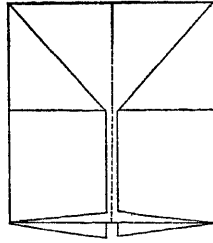
摺み方

今度は又別の摺み方です、先づま四角な紙の、邊と邊とを合せて長い四角にし、それを又横に二つに折つて、まん中に線をつけ、兩方のはしを、一圖のよゝにまん中で合せ、又そのはしをひろげて、二圖のよゝにし、次ぎにひろげた所を、三圖のよゝに折りかえし、又そのふちの裏の出ている所を、二つに折り又二つに折つて四圖のよゝにいたすのです、これわ紙入でございませう。

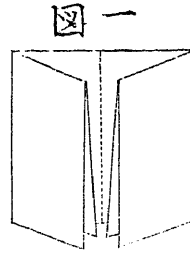
次ぎわ狐の面ですが、これわ始めわ紙入と同じよゝにして、ふちを四つに折る所を、五圖のよゝ



図六



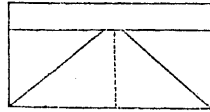
三圖



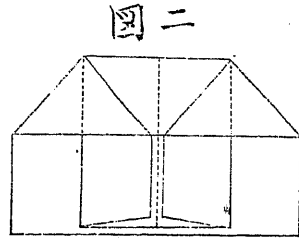
圖一



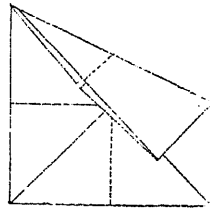
図七



四圖



圖二



五圖

十四  
に斜に折り、又六圖のよりに折り、中え指を入れ  
てひろげて、七圖のよりにいたすのです。

天狗の面

やまとの翁

今から何十年前か前のこと、世は未だ明治とはな  
らぬ徳川の時代、こゝに大坂から和歌山へ通ふ道  
中に紀見峠として、夫はく峻しい山道があつた、  
今ならば、瀟車で以て一時間もかゝらずに、寝て  
居て一日の中に何度も往復が出来るのであるが、  
其時分には、どゝしても此山を越して二日もかゝ  
つて歩いて行かなければならなかつたとのこと。  
ある年の十二月の大晦日、紀州の、一人の商人、  
これは子供の玩具を商人であるが、元正月に賣  
る品物を澤山大坂で仕入れて、何んでも明日はあ

正月しがつの元日げんじつだから、今夜こんや中に紀州きしゅうまで歸かへらんければならぬといふので、夜通よどしかゝつて此山路このやまじを越すことに決きめて 大坂おほさかを出發しゅつぱつした。

さてだん／＼道みちを急いそいで、やつて來たが、冬ふゆの日脚ひあしはまことに短みかい其上そのうへ澤山たくさんの荷物にもつを脊負せおふて居るのだからどうしても墓取はかどらないやつと彼の紀見峠きみとげへさしかゝらうといふ麓ふもとの處ところまで來てはや日は、ズツポリ暮くれて仕舞しまつた。見れば杉すぎや檜ひのきの大木おほき、いやが上うへにも生はえ茂しげつて晝ひるでも暗くらいこの山道やまみち、まして月明つきあかりもない晦日みせがひの夜よる、たい星ほしの光ひかりりのみは木の間あひだり泄たりれて會あひにキラツ／＼と顔かほを見せて居るが、黒白あやめもわかぬ眞まことの闇やみとは恐おそらくこの時ときのこゝとであらう。あたりは森しんとして大地てんちは殆せきんど、死しんだかとも思おもはれる。耳みみをすませば狼おほかみであらうかそれとも山犬やまいぬであらうか 物ものすこい遠吠とほらが、

山やまや谷たにに響ひびき渡わたつて 幽こほかに聞きえてくる様ようだ。

夫それに師走ししうの大晦日おほみそがひ 今いまでいへば二月にがつの始はじか一月

の末すへの事ことで其時そのときの寒さむざといつたら又またとない時分じぶん。

さすがの商人あまんとも この寂さびしい山道やまみちにさしかゝつて一寸ちよつと小首くびを傾かたけて見みた。けれどもこゝで引ひつ返かへして泊とどつてしまへば、折角せうかくの仕入しにいれ物が大變たいへんな損とんをするは分わかつて居る。まゝよこゝが男をとこの膽きもの試ためし所ところ 一番いちばんこの峠とげを越こす事ことにしよう。

こう決きめてしまつて、さて眞暗まつくらなこの峠とげをこえかゝつた。上あるにつれて坂道さかみちは益ますます益ますますで、草木くさきは益ますます生はひ茂しげり 一歩ひとあし滑すべらさうものなら、夫それこそ千刃ちよんの谷底たにそこへでも落おち込こまうといふ嶮けしい、山坂やまざか、迂餘曲折うごくせつ眞まことに羊腸やうちようたる捷徑しよげいで時ときに滑なる苔こけに足滑あしすべらせては胸むねをさすり、時ときに梢こえを拂はらふ颯々さつさつの音ねにも膽きもを冷ひやかしながら、さてだん／＼峠とげに近ちかく上のぼりか

つて、不圖上の方を咏めた所が、うれしや焚火の光りが見えて 七八人の話し聲も耳に入つた。

『あゝあの人たちも自分と同じ様に、夜通しで此山道を越すのであらう、大坂の方へ行くのか夫とも紀州の方へ越えるのか、何にしても此寒さに焚火にあたることの出来るのは、同よりの御馳走だどれ〜早く行つて温まらせて貰はう』

そこで一段の勇氣を鼓し足の疲も忘れて 峠までかけ付けて、やれ嬉しやと火の側に近づいた。こゝは此山の絶頂で これからは段々下り坂とならうといふ所、稍廣い芝生の周圍は老松古杉翁鬱として天を覆うて居る其真中にそだ打ちくべて煌々として火が盛んに燃えて居る 其火を取り巻いて彼は 十人計りの男が 何かしきりにがや〜と笑つたり話したりしてあつたて居る。

『やゝ御免なさい、どゝも寒くつて〜、少々温まらせて下さいませんか、時にあなた方はこれから どちらへお越しになるのですか』

たいもー 嬉しい一方、何の氣もつかないで ついけさまに しやべりついけなから 重い荷物を肩から 下して 側近く進んで行つた 地獄で佛といふのは この時の商人の心地の様なのを云つたのであらう。

すると大勢の男は 吃驚して一度に顔を見合はせて居つたが やがて其中の一人が

『やゝ温まるがよからう』

とこういつて さて商人の顔から身なりからジ〜ツと見下して又側に置いた荷物をじろ〜眺めて居る。

やれ安心と思つて商人は 大勢の中へ這入つて

疲れた足を押し伸ばし、兩手をかざして、火に温まつて、さて腰の烟草入を取り出し、服吸い付けて吹かし始めた。

大勢の男は暫らく商人の顔を見て居つたが、別に何も話しかけないで、又々自分等話し始めた。今迄は寒さと疲れと、嬉れしさで別に氣か付かなかつたが、だん／＼休まるに従つてよく／＼氣を付けてこの男どもを見た。所か何れも屈強な逞しい大男で、顔は鬚と汚とで埋もれて眞黒く、たい目と齒とか折々白く光つて見えるばかり、如何にも鬼の様な、スハと云は、取つて喰つてかゝりもし相な相格をして、腰の邊りには各自一刀を手挟んで居る。夫から其話しに耳傾けて見て、始めて驚天した。正しくこの者共は山賊追はぎの一群であつたのである。

頼む木蔭に雨か漏るとは、さても此時の事言は、狼の尾を履んで来て虎の口に臨んだも同じ事だ。商人は路用から荷物は勿論、生命までもないものと斷念した。逃げてでも逃かされるのではなし、詫びたからとて許されるでなし、嗚呼今年は如何なる厄年か知らん、數へて見れば己も丁度四十二、なるほど厄年には旅などするではなかつた。まゝよこれも天命だ、あきらめるより外はなし。

物事は諦めて仕舞ふと案外安心なもので、商人は始の程こそ驚天もしたか、今では反つて心か落付いて、平氣で彼等の話をさゝながら、火に温まつて居つた。時は丁度夜の一時か二時、例の山下しといふ身も切れ相な寒風か後からビユ／＼吹き付ける。前は火に温まつてるもの、如何にも後



るの方か冷めて堪らん、で商人はくるりと後向になつて 今度は脊中をわぶりかけた。

暫らく脊中を温めて居ると今度は又々顔か切れ相に寒くなる ハテどーしたものと考えた末、不圖氣かついて、手早く側に置いた荷物から玩具の天狗の面を取り出して顔に冠つた。あゝこれで大分顔の寒さが凌げるわいと思つて 相變らず脊中を火にわぶつて居る。すると、

『どーだ そろ／＼やつ付け様な』

と一人の盜賊がいひ出した。商人は思はずヒヤリツとしたあゝとう／＼やられるのかと思つて吾知らず盜賊の方へ振り返つた。すると盜賊どもは一度に、

『そーら大變だ 逃げる／＼』

取るものも取り敢はず吾一と先を争うて 麓の方

へと散々に逃げうせた。

今殺されるものと決めて居つた商人は 如何にも不思議で堪らぬ。あの様に狼狽て、逃げて仕舞つたのは何故であらうかと よく／＼考へて見た所がおかしや、仮面をかぶつた自分を眞個の天狗だと思つて逃げたのであつた。なるほど、夫も無理はない、見た所蓬々たる白髮に一面の赤顔 口は耳まで裂けて 鼻といつたら素的に高い この眞夜中併もこの深山で 誰か玩具の仮面だと思ふものぞ、賊どもは 確に天狗が人に化けて來たのが 自分等がやつけ様と云つたのを聞いて いきなり正体を顯はしたのだと見て取つて 儲こそ吃驚敗亡 あはてふためいて 逃げて仕舞つたのである 儲も不思議な命を拾つたものかなと思つてさて心を落ち付けて、周邊を見廻はして見ると、何

だか木の枝に袋がぶら下がったものが居る、は大方賊どもが忘れて行つたのだと思ひながら取つて開けて見て又驚いた。其中には大判だの小判だの取り交せて何百兩とも知れぬ大金が這入つて居たのである。

そーこーしてゐる中に、ぼつ／＼東の空が白みかかつて、あちらこちらの森に鳥の鳴き聲が聞こえて来た。もう大丈夫と思つて商人はそこを立つて出たが、今度は下り坂である上に、夜が明けてゐるから歩行くのも早い。急ぎに急いでとう／＼お正月の元日に家へ着いて、家内の者共に途中での事を話しをして、すぐ其金を靴上へ届けた。するとお上でも、これは盗賊どもがどこで取つたのか分らん金だから、お前が正直に届けて出た褒美に下げ渡してやるといふので、何百兩とも知れぬお

金が計らずこの商人の手に入つた。生命を助かつた上に、此大金が手に入つたので、たいさへおめでたい元日に二つも三つもお芽出たが重なつた。

それからこの商人は、夫を資本にして商賣を大きくしたが、だん／＼と儲かつておしまひには非常な大金持になつたが、今でも其時の難儀を忘れない様に、其家のお床の前にチャーンと其時の白い鬚の生けた赤顔の鼻の高い天狗の面を祭つて居ますとさ、めでたし／＼

一口ばなし

奥様「これに鍋や、靴前は近頃田舎から来たのだから、兎角物言ひが悪くって行けませぬ。これからよく氣を付けてね、物を言ふ時には始終「お」の字をつけてお言ひなさいよ」

言ひ聞かされて お鍋は裏の方へ行きまされたが

暫くすると わはたいしく駈けこんで来て

お鍋 『奥様 奥様 今ね お鳥がね お裏に干し

といた お麥をね 大勢でみんなお食べて居ます

よ』

奥様 『そーかい 追うておやりよ』

お鍋 『はい 畏まりました』

といつて裏へ出て

お鍋 『おはー おはー』

謎

前號の解

(一)鉛筆とかけて 兎島高德ととく

心は 木をけづつて字をかく。

(二)上手な自転車乗りとかけて、 啞の物語ととく

心は 手話し(手放)がうまい。

考へもの

坊ちゃんや嬢さんや 私を御存じですか、私は

身体中、金で、そして まことに小さな小さな

そーです まー曲尺で三分もありましょーか、餅

し人の行く所なら 野でも山でも學校でも幼稚園

でも どこだつて行かぬ所がありません。ですか

ら身体が小さくつても 一日に七里でも十里でも

歩きます瀧車でしたら 百里でも行きます 但し

皆さんの歩行くと違つて 頭を下にして行きます

すよ さーあてゝごらんなさう。





## 家庭

子供と天然

安井哲子

始終霧が深く、甚しい時には白晝でも街燈を  
 點し、それでも尙人の顔が見えぬ事さへもある様  
 な英蘭に暫く住んで居りますと「悲しみで樂し  
 みを取る」と云ふ様な、誠に沈んだ、眞面目な、  
 心持になつて來ますが、一つ海峡を渡つては隣國  
 に往つて見ますと、空と共に心までが晴れ渡つて、  
 自然に浮き々々する様になつてまゐります。此心

持の變化は丁度眞面目な英吉利人と、快活な佛蘭  
 西人の性質とを説明致す事が出來ます。又春先に  
 なつて櫻の花の咲き初める頃には、如何に不精な  
 人間でも外に出掛けて見たくなり、冬になつて雪  
 でもちら／＼降り初める頃には、如何に元氣な人  
 でも火鉢の側がなつかしくなるのは當然で、實に  
 氣候と云ふものは人の氣分に驚くべき影響を及ぼ  
 す者で御座ります。

獨り氣候ばかりではなく、四方山ばかりで圍ま  
 れて居る國には中々自信力の強い人が出來、風景  
 の良い國には美術家が生れ出る事のあるのは度々  
 其實例を見聞する所で、即地勢が人の心に感化を  
 與ふる事の大きいのも、亦實に驚くべき事で御座  
 ります、實に人間が高尙になり、不高尙になり、  
 又賢くなり愚になるのは、固より生來でも御座り

ますが、又一方には其周圍が大層關係を持つ者で御座ります。茲に周圍と申す意味は誠に廣う御座りますが、前申した通り吾々を取巻いて居る所の宇宙も亦其一つで御座ります。

一体子供は大人よりも一層外部の刺激に感ずる力が強う御座りまして、其強い所が即子供が其心力を發達せざるに尤必要な所で御座ります。夫故子供の周圍は成るべく健康に且優美なる事が肝心で日々目に觸れ耳に聞く所の者が知らず識らずの間に子供の腦髓に印象して、それが感化を與へて居る事は中々大きなもので御座ります。

御覽なさい。スキツランドの山の中に參りますと、山にも野にも、羊や牛が放してあります。夕方になりますと、幼い子供が是等の群を引連れて家に歸つて行く有様、子供の何倍もありそうな

大きな、而も恐ろしい角のある獸が、從順に力ない子供の後を慕ひ行く有様、此兩方の心の中に入つて、私の様な感の強いものは實に泣きます。そうかと思へば青い色を少しも見た事のない、眞黒な煙だらけの都會に行つて見ますと、子供達が苦痛を訴へる事も出来ぬ無力な動物を虐待する様、實に兩方の爲めに泣かざるを得ません。

どちらも皆貧民の子供、併一方は山水の間に牛羊を友として暮す者、自然に潔白な、正直な性質と、憐れな動物に對して無限の同情とを養はれたもので、又一方は俗の俗たる社會の眞中に育つもの、食べる事の外には何も興味を持たぬ者、利己心が増長して、同情心などは何處にゐるやら分らぬのも實に境遇の致す所、無理もない次第で御座ります。併かういふ子供も、偶慈善家の爲めに廣々と

した青い山野に二週間許も連れて行かれた時は御覽なさい。丁度籠の鳥が急に放された様に、自由自在に草の中や森の中を駆け廻ります。見上ぐる峯には氣を挫かれ、見下す川には心を洗ふて、今迄かくれて居るやさしい無邪氣な所が心に表はれて來ます。夫故悪少年を感化する爲めに與ふる仕事の中で、園藝や、耕作や、家禽を扱はせる事が、大層價値のゐる譯で御座りませう。

私が曾て逗留致した牛津の或家に入つと十とになる女の子供が御座いました。丁度秋の頃で蔦や木の葉が紅葉して誠に奇麗な川岸を一處に散歩に参りましたが、道々「何といふ奇麗な木でせう」よ云ふ言葉は度々可愛らしい子供のお口から漏れました。又私の滞在の中其母親の誕生日が御座りましたが、母親は其日室の中に可愛らしい草花

の咲いて居る小さな植木鉢を見出しました。どうせせう。之は此可愛い子供達が學校の歸り途に公園で探して來て、玩具の植木鉢に植ゑたのです。何と奇麗な心を籠めた贈物で御座りませんか。

概して天然を愛し、動植物を友とする者は、情が深く、徒に草木を傷け、虫魚を苦しめる者は、終には人の生命をも輕んずる様な恐ろしい者とならぬとは申せません。夫故英吉利の家庭や、幼稚園で毎日子供に金絲雀の世話をさせたり、又は植木に水をやらせるなど、小鳥や、家畜や、植物の爲めに自分が手を下して、やさしく世話をし、てやると云ふ習慣をつける事は誠に美しい事であると考へます。

此間或監獄署長の話に罪人に家禽を畜はせたら宜からうと云はれましたが、私は實に同感でど

うか下等社會の幼兒の集る幼稚園などは、耳か  
らのみ教ふるよりも、實際金魚を畜つたり、小鳥の  
世話をしたり、種を蒔いたり、水をやつたりする  
様な極美しい、やさしい仕事をさせて暴々しい、  
残酷な性質を良い方に向けてやつたならば其子供  
の爲ばかりか社會の爲めにも誠に好ましい結果が  
あらはれるであらうと考へます。

君が代は千代もさざと天の戸や

後 成

出る月日のかぎりなければ

親馬鹿といふを讀みこ

ふ み 子

第一卷第十號の家庭欄にヒツホホヌモス、アイラ

ンド氏は親馬鹿と題して、左のこゝに記されまし  
た。

『此間母親が庭で何かして居つて、彼れ(五才  
の男兒)が書いて居た躰のしれぬ繪をふみちら  
したとかいつて、彼大に腹を立て、折角書い  
たものをお母さんが消してしまつた』といつて  
泣き出して「御免なさいといひなさい」とせま  
ります。そこで母親は知らなんだのだから、さ  
う腹を立てるものではないと却て堪忍といふこ  
とを教へようとします。遂に母を打つた(中略)  
斯様な場合に母親が子供に訛をしたものであ  
らうか。子供の道徳の最初は親に服従するにあ  
るとかいへば、或は獨裁權をふるうて親に向つ  
て、何だと叱りつけたものであらうか、はた堪  
忍を教へたものであらうか。』  
右のやうな場合に、皆さんは如何な風にしてい  
らつしやいますか。私は一も二もなく阿母さんは

子供に向つて、一言詫びるべきものであると思ひます。私は日々子供と一しよに居りまして、時には、誤つて子供の足を踏むこともあります。また氣が付かないで、折角子供が骨折つて、こしらへて沙山などをこわすこともあります。斯様な時には自分のあやまりだの、不注意なのが、氣が付いて、あゝ、氣の毒であつたと思ひますと、おまはず、自然に、詫ひの言葉が出てまゐります。しかし、子供に詫をいたしました爲に輕蔑されたり威嚴をおとしたなといふ感を持つたことは、少しもありません。勿論人は足りないもので、時としては、人に對して、あやまりのあるは免れぬ事でありますから、其時にこれはすまぬと思ふのは、如何な人に對しても同じ事で、子供に對しても、この通であらうと思ひます、ですから、子供に

でも自然に詫言の出る場合はいくらもございませう。そして、これは、阿母さんか、子供に示すよい手本でございます。

若し子供に詫をした爲に、子供か言ふことを聞かぬ様になつたといたしますならば、これは、詫をした爲に、いふ言をさかぬ様になつたのではありません、阿母さんなり、先生なり、子供の手本となるべき人か、子供に對して、詫をしなければならぬ様な不注意な事を、度々繰り返すからであります。

勿論、子供は從順でなければなりません、不條理な場合までも、獨裁權をふるうて、叱りつけるのは、不自然な壓制ではないかと思ひます。たとひ、子供は、一時、壓へつけられましても、決して、心服して居るのはありません。只不服な



から、おそれて、だまつて居るのでありますから、  
 形丈は従ふことは従ひますが、心服して居るので  
 ありませんから、心はだんくくと反抗してまゐり  
 ます。

阿母さんか子供に詫をしないで、只子供に勘  
 をさせて、それで、勘を教へるといふことは、  
 よい勘を教へる仕方ではありませんで、はんと  
 うの勘を教へる場合は、外にいくらもあること  
 なくもひます。しかし、阿母さんが、一度詫をし  
 た後では勘をさせる様にすることが必要でござい  
 ます。

右は私か阿母さんの詫といふことに付いて、考  
 へたこととございませうか、皆さんの御教を仰ぐた  
 めに述へて見ました。

今昔いろは料理

(番外)

石井泰次郎

初春の料理

一、子木板かまぼこ

鱈或は小鯛などの、三枚にふるしたるを、小骨  
 など能く取り去りて、麻布に包みて水氣を取り  
 ぬにのせ庖丁の脊にてよくくたゝき、よく  
 煉りて摺鉢に取り、鱈の身十五尾なれば焼鹽二  
 匁五分、みりんのにきりたるを二勺堅魚のだし  
 一勺程を入れ、能き程にすりて、杉板の薄さも  
 のにて小さな羽子板を作り、夫れえ、さしみ  
 庖丁にて塗り付け蒸籠に入れむすなり  
 模様は紅にて好みになすべし、

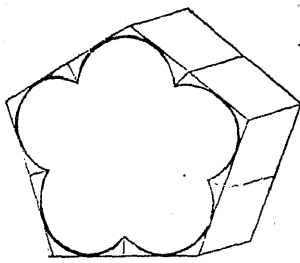
一、子木の子鴨

鴨の身をよくだゝと鹽すこし入れめりけん粉をも鹽の二倍程入れ、煉ませて醬油にて團子位に丸るめ、だし、醬油、みりん、等にて煮わけ。さて羽根の小ささを三五本宛指して羽根の子の如くなすべし、

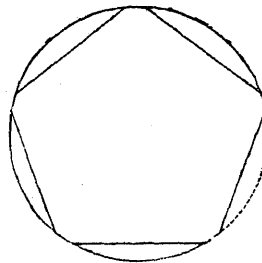
一、梅花くわぬ

くわぬの皮をむき梅花形に切形をなし（切方は後にあり）鍋の煮湯に入れてゆでる事二十分にして湯を搾りさてざらめさとう十五匁、味りん五匁、鹽一匁、を入れて煮る事十分にしてよろし

切方ははじめ大なる丸きくわぬの上下を平らたく切りて五方を少しづゝ切りて五角になすべしあまり正しく切ると小さくなる故少しづゝ切りて置くべし

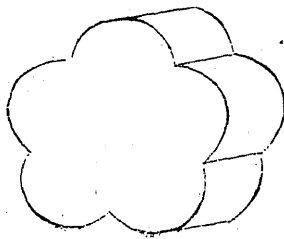


三図



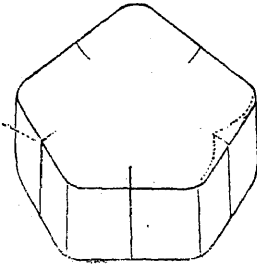
一図

正しく角を切りぬ



四図

此の初目六分位より切りぬ



二図

此の初目角より切りぬ

先づ五方を一圖の如く少づ、切て次に第二圖の五方に切り目ある如く小庖丁目を入れて角よりまるみを付けてむくべし

右出来上りたらば中皿に、白にくわぬ三ツ出にして、右の前へはこいた左に羽根をおくべし

傳染病 (一)

醫學士 長瀬復三郎

傳染病と云へは一般に植物性又は動物性の細微体の作用に由て起る疾病でありまして其細菌又は其細菌の排泄物作用によつて一の疾病を起して傳染即ち間接又は直接に他に傳播するものです

其細菌には種々ありまして例へば植物性の細菌にはチフテリア菌、結核菌、コレラ菌、チブス菌、などがあります而してチフテリア菌の如きは好んで咽喉頭氣管及鼻を起し自己の作る毒素の作用

で全身症状を起し又は心臓の麻痺を起します又結核菌の如きは重に肺に住居を定めて肺を侵し又コレラ菌、チブス菌は主に胃腸を侵して下痢を起します

右のチフテリア菌、結核菌、コレラ菌、チブス菌、などの様に病氣の原因になる細菌を病原菌といひます

其病原菌は如何にして人体に入るかといひますとコレラ菌、赤痢菌の様に重に飲食物又は飲料水等によつて入るものあり又結核菌の様に空氣中の塵埃と共に人体に入り或は結核患者の咳嗽時に破傷風、ヘスト菌の如く創口から入るものもあります、つまり病原菌の人体に入る道を分けますと一、呼吸器によつて入るもの二、消化器によりて入るもの三、皮膚より入るもの、三つになります。

病原菌か此等の入口から人体に入りさへすれば必ず病氣になるかといふにそれに定まつたものはありませぬ即ち其微菌が人体に害を與へる丈の力がなければなりませぬ即ち病原菌の働作力が強くなければ病氣を起しませぬ永く日を経たり高熱に逢つた微菌は毒素又は働作力が少くて害を成すとの弱いものであります

又病原菌が人体に入るには其の進入する門の開通して居る必要であります例へはチフテリヤ菌にしても咽頭や扁桃腺が荒れ居るものは侵さるゝとが易く結核菌でも健全なる肺の中に入つては働くとは出来ませぬ又これら菌が入居る水は飲んだ人があつても其胃腸が健全て之を殺す丈の力があれば其微菌は成長しませぬ例へは枯木に虫のつき易いのと同一ことで弱い所のある人には色

々の病原菌か入り易く又敵の侵入があつても此方が強ければ十分之を防ぐことが出来るのと同じく病原菌か入つても体さへ健全であつたならば侵されることはわりませぬ

又傳染病は素因と遺傳とに關係があります例へは生來 腺 質の人は肺結核にかゝり易く又病氣によつては男よりも女の方がかゝり易い病氣があります斯の様にある病に對する天然の關係を持って居ることを素因と申します

素因のことをいひましたから序に免疫のことを申しませう即ち如何にしてもある病例へは痘瘡、麻疹等にかゝらない人がありますこれは其病に對する天然の免疫の素因を有するのであります（但し天然免疫の素因はなくても機會がないためにある病にかゝらぬ人もあります）又種痘をしたもの

は天然痘にかゝりませんこれは人工の免疫の素因を得たものであります又麻疹、チブス、猩紅熱、は一度これにかゝると再び罹るゝの少ないといふのはこの病に對する免疫性を得たのであります

今迄申しましたことから考へて傳染病に對する注意を申しますと第一は細菌の進入門を開かぬこと 例へば常に咽頭を清潔にして置くとか又腐敗したものや不消化物を食べないで居るとチフテリヤ菌、チブス菌、セキリ菌、コレラ菌などは進入することか出來せせん

第二は健全にして進入したる細菌の力を弱むること 即ちたとひ細菌か入つても其体か健全であるとその細菌の力に打ち勝つて動作力を弱めることか出來て病氣にはなりませんですから常に体を壯健にして置くことか必要であります

第三は消毒これは前の二つに次に必要であります即ち大便秘等にある不潔物を消毒すると傳染病の傳播を防ぐことが出來又室内の空氣を清潔にしたり痰は必ず痰壺(消毒液を入れたるもの)に吐く様にするると痰の中にある病菌の飛散を防ぎ又病人の衣服等を消毒すれば其細菌を撲滅せしめます消毒の方法は高熱に逢はせるとか日光にさらすとか昇水石炭酸水等を用ゆるなど色々ありますこれから色々な傳染病に付て一々申しませう

A Good life keeps off wrinkles.

善良な生活をする人は皺がよらない



子  
齋



虎の話

佐藤禮介

今年(ことし)は寅(とら)の歳(とと)であるから、其(その)のトラといふに因(ちな)みて虎(とら)の話(はなし)を致(いた)さうと思(おも)ふ、虎(とら)は我(われ)が國(くに)には産(う)せぬけれども之(これ)につきての傳(でん)説(せつ)は頗(おほ)く多(おほ)い巴(ば)提(てい)使(し)が虎(とら)を退(たい)治(じ)したとか、加(か)藤(とう)清(せい)正(せい)が十(じゅう)文(ぶん)字(じ)槍(やり)を嚙(か)み折(を)折(を)れたとか、地(じ)獄(ごく)の鬼(おに)は腰(こし)に虎(とら)の皮(かわ)を巻(ま)き付(つ)けて居(ゐ)るとか、兒(こ)供(ども)の時(とき)から隨(ずい)分(ぶん)聞(き)いて居(ゐ)るが、果(はた)して「虎(とら)嘯(せう)げば風(かぜ)を生(な)ず」る程(ほど)、不(ふ)可(か)思(し)議(ぎ)の能(のう)力(りき)を持(も)つて居(ゐ)るものてあるか、其(その)實(じつ)体(たい)につきて吟(ぎん)味(み)しやう、何(ど)處(どこ)に棲(す)むか、——虎(とら)は亞(あ)細(じ)亞(あ)にのみ産(う)するもので他(や)の大(だい)洲(しゅう)には産(う)せぬ、し(し)かし亞(あ)細(じ)亞(あ)の中(なか)でも中央(ちゅう)亞(あ)細(じ)亞(あ)には棲(す)みませぬ、最(も)多(おほ)くは東(ひがし)印(いん)度(ど)で之(これ)に次(つ)いで、馬(ば)來(らい)半(はん)島(とう)、支(し)那(な)、朝(あ)鮮(せん)等(とう)にも産(う)する、如何(いか)なる形(かたち)か——虎(とら)は其(その)概(がい)形(けい)甚(た)だ猫(ねこ)に似(に)て大(おほ)き

くある、牝(め)虎(とら)の大(だい)なるものは鼻(び)端(たん)から尾(お)の末(まつ)端(たん)まで九(く)尺(しゃく)餘(よ)あつて、其(その)内(うち)尾(お)の長(なが)さは三(さん)尺(しゃく)許(あ)りある、虎(とら)の瞳(ひと)孔(く)は猫(ねこ)の瞳(ひと)孔(く)の樣(よう)に日(ひ)中(ちゅう)に細(こ)い線(せん)の形(かたち)をなさないで、圓(まる)き小(こ)孔(く)となる、虎(とら)は獅(し)子(し)の樣(よう)に鬃(け)を有(あ)りませぬが、老(お)いたる牡(む)虎(とら)は頰(け)の毛(け)は大(だい)層(そう)長(なが)く延(の)びて鬃(け)の樣(よう)になつて居(ゐ)ります、昔(むかし)の人(ひと)は之(これ)を見(み)て虎(とら)鬃(け)といつたのかも知(し)れませぬ毛(け)皮(かわ)は、赤(せき)黄(わう)色(しき)であつて黒(くろ)い横(よこ)筋(すぢ)がある。脚(あし)の内(うち)側(がは)と頰(け)の下(した)と腹(はら)と、眼(まな)瞼(た)の上(うへ)の班(まだら)とは全(まった)く白(しろ)色(しき)である、尾(お)は淡(たん)黄(わう)色(しき)で黒(くろ)色(しき)の環(わん)紋(もん)がある、全(ぜん)身(しん)の赤(せき)黄(わう)色(しき)は濃(のう)淡(たん)種(しゅ)々(ざ)である、時(とき)々(ざ)甚(た)だ淡(たん)色(しき)であつて殆(ほとん)ど白(しろ)色(しき)に似(に)たるものがある斯(か)樣(よう)な虎(とら)を白(しろ)虎(とら)といふ、白(しろ)虎(とら)は黒(くろ)い横(よこ)筋(すぢ)も極(きま)めて淡(たん)色(しき)である、虎(とら)に白(しろ)虎(とら)あるは馬(うま)や象(ぞう)に似(に)たものがあると同(どう)じ譯(わけ)である、

習(じゆ)性(せい)——虎(とら)の常(つね)に棲(す)む所(ところ)は高(かう)原(げん)の叢(そう)や、藪(かぶ)ある

沼地等である。虎の毛皮の色は枯草と其日蔭との色に能く似て居るから隠れて居るには、甚都合良いのである。即ち餌とすべき他の獸に見付けられず、に狙ふことが出来るのです、かく外界に似た色を保護色と云ひます、

虎は獅子などと同じく常に棲んで居る岩窟又は樹洞を有して、休むときは何時でも此所に退くのである。昔の人が虎穴に入らざれば虎子を得ずなどいつたのも斯様な棲所を指したのでせう、

虎が食物を獲るには他の獸が水を飲みに出で来る所を付け狙ふのである、即ち他の獸の通るべき小道の傍に潜伏して獲物の来るのを待つことと、度猫の鼠を付け狙ふ様である、他の獸が来れば益、体を地面に平伏し適當の距離に近づけば電光の如く奮進一躍して之に咬み付くのです、若し其獸が

近いて來らぬ時は腹を地に付け匍匐しつゝ進むのです、其地を踏むのに音を立てずスラ／＼と匍匐行く有様は蛇の匍ふに似て其巧みなること驚くばかりである。若し一度跳び懸りても他の獸を捕へ誤りたるときは決して之を追究することはない、而して更に第二の狙ひを致すのです。此時は甚激して居るゆゑ大に危険であつて往々人間をも害することがある、

虎の性質の猛烈なることは殆ど想像の外である。其の餓えたるときは如何なる事があつても迫害を猶豫することがない、即ち他の動物が如何に強くとも如何に凶暴でも少しも躊躇することなしに跳び付くのです。故に屢々自ら死を急ぐこともあるが又都合良く他獸を斃すこともある、象や水牛を襲ふときは虎自身が斃さるゝことが多い、



虎は通常木に登らず只非常に恐怖したるときのみ稀に木を攀ることがある、又屢水に入り、其泳ぐこと甚巧みである

蕃殖——虎は一回に兒を産むこと三頭位が通例である、虎の兒は活潑で戯れ好きで大層可愛らしいものであるそうだ、母虎は常に兒を大切に保護し次第に成長すれば跳び付くこと、噛み付くこと格闘することを戯の間に教へる、且つ虎兒成長して乳汁の外に別種の食物を得ることが必要となれば母虎は先づ弱き動物例へば鹿、猪、豚等を捕殺して其方法を其兒に示すものである、斯様にし教へ慣れたる虎兒は自ら餌食動物を捕へ得る力を生ずるまで母虎と離れることはない、即ち二年間も母虎に養育せられる、母虎が其兒を伴ふ間には殊に凶暴となつて地の動物を殺害するをが夥

しい而して新に母虎を離れたる幼虎は老虎に比して一層他の動物を害することが多い、幼虎は一時に三四頭の牛又は羊を殺すことがある、老虎は一時に牛又は羊一頭以上を殺すこと殆どないのである、斯様な虐殺を行はうとするときは幼虎は自分の常住せる岩窟を去り村落又は牧場に近しい所に潜伏し夜中にいで、牛又は羊を噛み殺し之を隔りたる密林の中に挽き行きて貪食するのである、人に與ふる害——虎は人類を害すること頗る多い嘗て印度に於て騎馬の人の一隊が森林の中を横りたるに一頭の虎突然藪の中から躍り出て騎手に跳び懸つて喰ひ付いた、人は虎と共に馬から落ちた、虎は直に其人の胸を咬へ齧着たる林の中に入りて其の形を失つた、其動作極めて迅速であつたから、同行の人も之を救ふ暇なかつたそうだ、又

嘗て印度駐在の英國士官よりの報告によると、或る夜番兵の居たるにも拘らず一頭の虎侵入し來りて天幕の中から兵士を咬へ去つたといふことである。斯様な實例が甚多いから、亞細亞の人をして大に虎につきての恐怖心を惹き起さしむるのである、現今でも虎の生存数は頗る多くあつて、毎年虎の爲に殺害せらるゝ人随分多い、一千八百八十九年東印度のみにて五百四十六人虎の爲に殺され家畜は六千八百八十二頭殺害せられたとの事である、

虎狩、——印度に於て虎は斯様に人類を害し家畜を殘殺するものであるから政府では虎を捕殺したものに報酬を與へることになつて居る、虎を捕へる方法は種々ある、或は毒矢を弓につがへて虎が來り觸れ、ば自ら發する様に裝置して殺すことあり、又他の法は大きな土穴を掘つて其内に羊

の兒を入れ其羊の耳に小石を結び付け絶えず啼かしむるのである、虎は其啼聲を聞いて尋ね來り羊の兒を喰はんとて土穴の周圍を幾回となく廻り歩く其時傍の木に登りて豫て待ち構へたる獵夫は銃を以て之を撃ち殺すのである、

虎狩は印度の諸侯及び印度駐劄の英國士官等の非常に興味ありとする處である虎狩をなすには人々皆象に乗りて一列に整列し合圖に従つて漸次に藪の中に進入し草木を打ち敲きて虎を追ひ出し之を銃殺するのである、此時に當り銃丸若し虎の要部に當らず只僅に傷くるのみなる時は虎は極めて猛烈の性を現はし象の背部に跳び付きて騎手に噛み付かんとすることある、随分危険な遊獵である代りに亦云ふべからざる面白みがあるそうだ、

馴し得る性質——虎の猛烈なる性質は前に記す

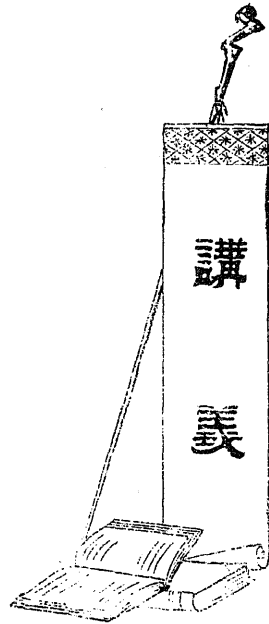
る如くであるが之を慣せば人に馴るゝ様になる往  
 年佛國巴里の植物園に飼ひたる虎は印度から船で  
 送られたものであるが大層人に馴れたゆゑ飼養者  
 は虎の四脚の間に横はり或は其背を枕として臥す  
 ることを得たといふことす、又嘗て印度より英  
 國に持ち來されし牝虎は船中に於て少しも悪性を  
 現はさなかつたがロンドンの動物園に檻飼せらる  
 ゝに至つて甚發怒し易くなつた、然るに其後一  
 水夫此動物園を觀に來た、此の水夫は此牝虎を英  
 國へ送るとき船中に於て飼養したものである、水  
 夫が牝虎の檻に近づいたところ、牝虎は此水夫を  
 忘れなかつたと見ゆ、体を檻に摩り付け大に喜び  
 の様子を現はした其後此水夫來る毎にいつも喜び  
 の有様を現はしたとのことである、

如何に利用せらるゝか——虎の毛皮は極めて美

麗であるから敷皮として甚宜しひ從て其價も頗  
 る高い、其肉は印度人の食用に供せられ、骨、齒、  
 及び爪等まで悉く賣り拂ひ得るゆゑ、虎一頭を捕  
 獲すれば一ヶ年間土人の一家を養ひ得るといふこ  
 とである、

舌と膽とは共に其産地に於て藥品として用ひら  
 る、土人は第一等の良藥として其膽を貴重するこ  
 と恰も吾邦に於て熊の膽を珍重すると同じである  
 膽とは肝臟の傍にある膽囊のことである、

要するに——虎は其外形猫に似たれど甚大きく  
 性極めて猛烈であるが少しも不可思議の力を有し  
 て居ない野獸である、今猶多く生存して人畜を害  
 すること甚しいものゆゑ吾人は速にかゝる害獸の  
 盡滅を望むものである、



兒童研究法

文學士 松本孝四郎講演

知覺作用に付いての注意

吾々は觀察といふことをよく言ひますが、此觀察と言ふのは、其時に心が注意の状態をとり、之を繼續して實物に付ての知覺又は觀念を作るのを言ひます。幼兒が種々のものを觀察した結果は、知覺又は觀念となりて、幼兒の思想界を構成します。なほ追々發達すると、圖書に由て、丁度實物

に接したやうに、知覺又は觀念を作る、さて幼兒の觀察、知覺、觀念が如何に精密であるか、といふことは手細工物、畫、話しぶりなどに由て、判斷することが出来ます。即ちこれらのもので、幼兒の觀察した結果を知ることが出来ますが、之には記憶といふものがよほどまじつて居り、此記憶の度は子供に由りて大そうちがひがあります。又筋肉の運動のよく發達したるものとして居らぬもの巧なものと、巧でないのと、容易に疲れぬものと、疲れやすいものと種々あります。ですから、たとへば畫方に付て申しますと、一の直線を書かにしても、やすいのと六かしいのとがあります。幼兒を右きものものといたしまして、最もやさしいのは、次は、次は、最も困難なのは、であります。此通り、同じ直線でも、

其方向に由て、幼児にはよほど六かしいのですから、たやすい直線に富むで居るものほど、幼児には書きやすいわけです、又曲線は、圓周的のものが幼児には書きやすいのです。

序に書方に付て申しますが、一体黑板に或物を書いて之を幼児の石盤の上に書かすといふのは地面に殆んど直角なる平面上のものとして、幼児に知覺させておいて、そうして、幼児が書く時は、地面に殆んど平行なる平面上に書かなければなりません。即ち異なる平面上に書くのですから、六かしいわけです。且つ、手本としては大きく見する故に、幼児は割合を縮小して、小さく書く必要がある。それで此大さの割合といふことも、幼児の精神は費消される。又記憶が不完全ならば、手本を見て、之をおぼえて、そうして

書くのにもよほど骨が折れます。

三十八

故に、手本を示して書かする場合、殊に幼稚園の初によく注意すべきことは、幼児の筋肉運動の練習の順序を誤らぬやうにすべきことです。其順序はどうであるかといひますと、初は石筆も鉛筆も持たずに、指のみにて空中に練習するがよろしいでせう。即ち手本の書を、指にて自分の前の空間に書く、之を空中練習と稱します。此練習の利益は、手本と同じ平面上に書くことができること、又手本と同じ大きさにすることができること、又凡ての幼児をして同じことを同時に練習せしむることができ、などの利益です。但し、此時に注意すべきは、教へる人が兒童の指の運動を早すぎぬやうに注意することです。一体幼児はやゝもすれば、運動を早くしすぎるもので、早すぎると手

本のまねをすることが足りなくなる。ですから教へる人は、落付て静に練習させることが必要です。又教へる人がかけぢゑをしながら、幼児に線をひかすことは利益がありません。或人は、空中練習はわとが残らぬ故に、ゆるりと形を認むる能はず、不都合なりと言ふ。併し、之は誤で、空中練習は筋肉の練習を土臺として居るのですから、わとの形よりも筋肉の練習といふ目的は已に畫く時に達せられて居るのです。

さて空中練習の後はいかにするか、といふに次には机上に畫かせるのです。やはり只指でさせるのです。之は黒板と平面はちがひますが、前の空中練習をしたあとでは十分でできます。此机上の練習総りて後、石筆なり鉛筆なりを持ちて畫かせる。石筆と鉛筆との利害に付ては、一定した説はあ

りませぬ。未定です。小學校では、追々石筆が少くなりましたから、小學校との連絡上から言へば、幼稚園でも鉛筆にする方がよろしい。又石筆にしても、鉛筆にしても、持ちやうをよく教へなければなりません。又首を曲げなければ、筆のさきの見えぬような姿勢をとらしめてはなりません。正しき姿勢をとらせることが必要です。

概して圖畫、習字、手工など、指の筋肉の練習は精神の疲れぬうちにするのがよろしい。一休大關節は、割合に運動しても疲れぬが、指の關節は疲れやすい。ですから多く運動したあとで指の練習を課するのはよくありません。

子供の知覺、觀念といふものは、以上申した、物を畫くこと、又は物を作りて見ることに由ていよくたしかめらるゝものであります。



史傳

津崎矩子

下村三四吉

余は、去年六月の本誌上より、明治維新前に於ける福岡の女丈夫野村望東尼の傳をものし、數月に亘りて完結を告げき。蓋し、嘉永六年米艦渡來して和親通商を請ひしより、内外の多事言ふべからず、混亂紛争の狀、恰も風怒り濤立つの概ありしが終に一大新天地は豁然として開かれ、以て今日の盛世を見るに至れり。この間の歴史は實に我國に於ける無前の偉觀にして、これを世界に求むるも、殆どその比なかるべし。この時に當り、國

民の志氣旺盛として振興し、その最高潮に達せしも宜なりけり。望東尼の如きは、婦人界に於けるこの氣象の一代表者なり。而して、望東尼と相比すべきもの、更に二人あり。その一人は京都の津崎矩子にして、他の一人は常陸の黒澤登幾子なり。京都を中央として、一は西國に在り、一は關東に出でたり、亦奇とすべし。この三人の事蹟は、その曲折もとより各々同じからずといへども、勤王の志に至りては則ち一なり。既に望東尼を傳したる上は、他の二人とも説かざるべからず。よりて、こゝには、先づ津崎矩子の事蹟を述べ、然る後残れる一人に及び、余が記述の本意を始終せんと欲す。

望東尼の傳中に於いて、津崎矩子の事蹟の一部は、既に説きたり。望東尼の傳を讀みたる方々は

その文久元年の上京中、津崎村岡の幽居たる直指庵を訪問し、

雲井にも、君が名たかく、聞えけり

したひくる身をあはれとも見よ(望東尼)

はるばると尋ねし君のめぐみを、

しづこころなく、あはでくるしき(津崎村岡)

との贈答せりしことを記憶せらるゝならん。この津崎村岡は即ち矩子にして、矩子はその幼時よりの本名、村岡は近衛家の老女としての名なりしなり。村岡の名の高く雲井まで聞えたりしは、いかなる事蹟によれるか。本傳にて説かんとする主要部はここに存せり。

矩子は、大觀寺宮の家士津崎元矩の女にて、天明六年、京都の西郊なる上嵯峨村に生れたり。天明の年號を聞けば、直に田沼意次父子の幕府に於

ける專權を連想し來るべし。迷惑の年と呼ばれたる明和九年は、安永元年と改元せられたれど、この以前よりの田沼父子の專權は改まることなきのみならず、却てますますその勢を加へたり。されば、幕府の政治甚しく腐敗し賄賂は公に行はれ奢侈柔弱の弊風は滔々として全社会に波及し、加ふるに、安永より天明にかけて、大風、洪水、噴火、地震等の變異屢々發して、人々安さ心とはなかりき。尊王の情熱燃ゆるが如き高山彦九郎が「いざ叡山に紙旗推し立てん、千人の義兵あらば、豎子を倒さんは目前に在り」と絶叫し、陰に幕府を滅ぼさん企圖をなししも、この頃なりけり。

勢は窮まりて又變ず。天明六年即ち矩子が生れし同年に徳川十代の將軍家治薨し、その遺意によりて田沼意次は、老中の職を奪はれ、且つ封を削



られ、「飛ぶ鳥をも落とす」といはれし勢威は、一場の夢と化し去りぬ。田沼が悪政の後を承けて、白河の城主松平定信は、心を盡して十一代將軍家齊を輔佐し、所謂寛政の治、美を享保の治に比するに至り、天下の面目再び一新せり。

寛政五年、定信は職を辭しけるが、矩子はこの年始めて近衛家に仕へたり。時に年八歳なりき。

彼が勤王の事に與れる生涯はここに始まれり。正に是れ、千古の卓見を以て海防の説を立てたる憂國家林子平が仙臺の幽居に病死し、高山彦九郎が九州にて自殺したるとも同年なり。

矩子が仕へたる近衛家は藤原忠通の長子基實に出で、九條、二條、一條、鷹司の四家と共に五攝家と稱せられ、攝政關白に登るの特權を有し、朝臣中の最も重要なる位地を占めたり、近衛家の當

時の主公は基前といひしが文政三年、年三十八歳にして、早く薨せられき。

近衛基前の薨前十二年、即ち文化五年に子忠熙公誕生ありて、ここに至りて、後を嗣がれぬ。忠熙公誕生の頃は、矩子が該家に事へたるより十五年を経たれば、忠熙公の保育輔導につきて、矩子が與れることは少なからざりしならん。矩子は、事理にさとく、雄健の氣象さへありしが、温良謙讓の美德を具へ、つゆほこりたるさまなく、事處するに縝密にして、同家の上下のものに厚く尊敬せられきといへば、尤もかかる任務に適當せる人といふべし。

ヴァクトリヤ女皇傳(つづ)

鄭越生補譯

兎も角もキリアム四世の即位によりて、女皇は

頗る皇位に近き身分とはなつて來たが、まだ全く定まつたと云ふわけには行かぬ、なぜなれば皇后アデレードはまだ壯齡のであるから是から後御慶事が無いとも限らぬ、若し御慶事があつたとすればその皇子が皇位を繼承するのは當然たることであるから、

然るに女皇はだんく御成人なさる、年は追々に女皇のために都合よく回轉すると云ふわけで、一千八百三十七年六月二十日キリアム四世はとうく皇子なくして崩御せられたので……我が亡き後は姪ヴィクトリアをして王位を繼がしめんとこの遺勅を賜はりて……女皇には十八歳の妙齡を以て踐祚せられ、其の翌一千八百三十八年六月二十八日エストミンスター寺に於て即位の大禮を擧ぐることになつた、

この時の倫敦の賑ひといふものは實に非常なもので、前代未聞の盛典であつたといふことで、時の新聞紙や雜誌なども皆異口同音に紙にも筆にも言ひ表はすことはできぬ、言語以上の、文字以上の賑ひであるといつてあるが、左様であらう、在朝黨といはず在野黨といはず、上は王家の高貴より下は樵夫海女の微に至るまで、誰一人ウィクトリアと稱せらるゝ極めて可愛らしき少女の即位には反情を表したものは無い、殊に歴史上現王統に對して不満を抱いて居る一派の貴族があつて、王位繼承の起るごとに何に彼と異議を申し出し、又申し出でぬまでも多少の風説を引きかこして一般人心に疑懼不安の念を抱かしむる傾向が、毎時ありがちであつたが、此の度に限りては此等の貴族さへブツツリとも云はぬ、従つて何の風評も起り

得なかつた、何にしても是れまでの帝王中國人一般の満足を得て即位せられたること此の少女帝の如く盛なりしは殆んど無かつたのであるから、その即位式が歴史以來の盛大であつたのも無理はないのである、

六月二十六日……まだ定日より二日も前である……二十六日にさへ、流石世界の大都と云はる、倫敦も殆んど一錐を立つる餘地の無いまでに人を以て充された、翌くる二十七日となつては何百万何千万と倫敦目がけて押し寄せ来る老若男女に通輦の道筋に當る道路にはレールの上も何も一面、市内鐵車の運轉さへも停止するの止むを得ざるに至つたと書いてある、

いよ／＼二十八日となつた、天氣も至極麗かである、午前十時八頭の驢馬は鳳輦を牽き儀仗整々

としてバツキングム城を練り出した、國民歡呼の聲は天に轟いた、何れも少女帝の万歳を祝せんと、潮の如き人波に鳳輦はしば／＼停止した、女帝は親しく國民狂喜の状を見そなはせられて玉顏殊に麗はしく十一時エストミンスター寺に到着せられた、やがて宣誓式もすみ戴冠式もすんで、即位の大禮も無事に終りを告げた、ヴィクトリヤ女皇万歳、大英國万歳、といふ聲の中に、

越えて一千八百四十年二月十日二十一歳の少女帝は、その從兄に當らせらるゝアルバート親王と大婚の式を挙げられた、親王はサククス、ブルグ、ゴタ侯の第二子である、之れより先き一千八百三十六年女皇十七歳御誕辰の祝節に、親王はケンシントン城に上りて女皇に會見したことがあつたが、その時親王の奉つた指輪は、以來女皇の第一

貴重物であつた、常に女皇の左手の第三指に閃いて居つたが、とうとう女皇が女皇の配偶者となつたのである、

これより關雎の御睦み最とめでたく、皇室いよ々榮昌に赴いた、試みに皇子方の御生誕に付て記し奉れば、

ヴィクトリヤ内親王

一千八百四十年十一月二十一日降誕  
獨逸帝フリードリッヒ一世に嫁す

エトワード七世

一千八百四十一年十一月九日降誕  
英抹國王クリスチヤン十世の長女アレキサンドラ内親王を娶る英國の現帝なり

アルフレット親王

一千八百四十四年八月六日降誕  
露西亞帝アレキサンダー二世の女マリヤと婚す  
エザンホロー公たり

ヘレナ内親王

一千八百四十六年五月二十五日降誕  
シエレスウイッヒ、ホレスタインのクリスチアン親王に嫁す

ルイズ内親王

一千八百四十八年三月十八日降誕  
ロイン公に嫁す

アウザー親王

一千八百五十年五月一日降誕  
普西亞のルイズ内親王を娶る  
コンノート公たり

ピートリス内親王

一千八百五十七年四月十四日降誕  
ハッセルのヘンリー親王に嫁す

女皇即位以來英國の國勢の進んだことは殊に著しいもので、御即位の時と女皇即位六十年祝典の時の英國は、まるで別の國である、生れ代つたやうであると、その祝典の時に頌した人があつたが、まことに其の進歩は烈しいものであつた、が、今こゝには女皇の政事上に於ける御功績は一切述べぬとせよう、「婦人と兒ども」と云ふ雜誌であるから、これで女皇の傳記は一先づ終りました、また面白き事やら必要なることは何れ述べるまでも、兎も角筆を擱くことにせよう

(完結)



文苑

門松の説

布士の舎

明日の爲とて松竹にしりくめなは取りそろへて、ゆづり葉、齒染など、家毎に葺き侍る、御門公卿の家はさらなり、とは、彼のえせ文としられたる、四季物語の言葉なり。我また世にならびて、立つや立たずや知れねども、明日のまけに、今宵の程、おのか門に門松の説一つたてんものと、一間にたてこまれるは、我ながらいとくをこがましうこそ。

寒けしや 除夜のならひとて 大路にひきもて  
 きえぬけいしの音を、木枯の風の誘ひ来て、窓のを戸をかすむる聲の、やがて埋火かいおこしつゝ、  
 燈などかきたて、こゝらの文の林にたちいれば、  
 枯木のみいとおほくて、わくれどく、さらにとるべき材のあるべうもあらず、やみなむか、さりとは心おち居ず、落葉拾はんか、さりとは皆朽ちたり、梢をおろさんか、梢なきをいかにせん、根こしとらんか、根なきを如何にせん、終に一夜をこめて、たましくにときはの色あるをみるとりては、掘しかきはの榮あるもおこしては、やうくくに考へ得たるもの、かゝるさまなりければ、猶ひがごとくもすくなからざるめり。いでや年の初、門に松たてそめしは、今より八百五十餘年の昔なり、竹をたつるは、また三百四十年ばかりく

たりて、應永の頃よりや始まりけらし、されどそのころは、猶賤が家居のかと毎に立てられけるにて、都におしうつりぬる事は、いつの代よりか定かならず、鹽尻に家はあれど、いかにぞやおぼゆる、己はかの光明峰寺入道の攝政たりし時によめりける、初春の花の都に松をうゑて、民の戸とめる千代ぞしらるゝといふ歌をもて、物にみえたる始とはせん。さるにても、昔松柏を以て、賤が家に、疫鬼をさけん爲に門戸にたて、或ははさみかかれたる時こそ所謂門松あるは立松にはありけれ、かの鄭玄のいへる華紀麗のしるせる昆布果實等の物を挿み、あるは齒朶ゆづり葉等を用ゐて飾られたる兼冬の頃となりては、かのづからこゝに言葉の沿革をなして、松飾とは云ひをめしならさるか、徳川の代の久保田侯の人飾 佐賀侯の鼓の

胴飾 平戸侯の松の代に椎の板飾の定例ながら畢竟世下りて飾といふ事のあかしともならんかし。されとこれらは、一時のおこり、一家のならはしにて、もとより時と共に亡ひ、家と共に衰ふるは、いふまでもなければと、おのれは橙海老、なとしてかざられたるをは、門松といふとも、ひたすらに、松あるは松と竹とを以て、たてたるを松飾とはいはすもがなと思ふぞよ。そはとまれかくまれ、今日の松のたてさまは、おしなべて二百四十余年前、寛文二年、及び十年の二度に、七日に松竹を取拂ふべき町觸いて、久しく十四五日の頃までたておかれつるならはしに、強てさかのぼられしよりこのかた かはらぬのゝの如し。また今の縁門めく物は、皇朝にもふるくよりありつることゝおぼゆ、こは所によりては中々による

しきものなから、このころおしなべたるならばし  
ならぬはいかなる故やらん。さてまたたつる日  
は、今こそさまくなれ、のぼりての世にいと首  
かたむくれば、顯季ぬしの歌に、門松をいとなみ  
たつるそのほどに 春あけかたによやなりぬらん  
さりけりく、今宵ぞやとつぶやく耳に、け近く  
八聲の鳥なきて、年はあけがたになりけり。あ  
はれやかみんく、さるにても此かたまつ、初日  
の影まちて、とさはの色に匂はんや 匂はじやあ  
げつかなうこそ。

故郷と都

(故郷に母と女の友あり)  
(都にわれと男の朋あり)

鷺

水

故郷

年の始にうちよりて

へだてぬ君と今こゝに

語るも聞くも武藏野の

都

其の一もとの外ぞなき

其の一もとの外ぞなき  
其儘なるは都より

故郷

こぞの玉ひし言の葉の  
わが故里を思ふなり

雁の玉章と絶えしと  
八重の汐路を距つとも

都

恨むはひろか母子中  
距てぬ心は君ぞ知る

距てぬ心は君ぞ知る  
空行く月の隅田川

故郷

よしや海山遠くとも  
上野の花を音つれん

別れし今日の身と知らさ  
葦つみしも夢なれや

都

樂しき野邊に打ひれて  
歌留多取りしも夢なれや

歌留多取りしも夢なれや

今は旅寐のうき思ひ

せめては雁の玉章を

故郷

夢のうき橋渡る身と  
過し月日や來ん年の

都

又の逢瀬ぞいそがるゝ  
いかで忘れん來し方の

故郷

昔戀しき餘には  
いつの世誰か定めけん

都

其かみ人ぞ恨めしき  
嬉しきたねと諦めて

故郷

さは去ながら久方の

又逢ふまでの片身とて

思ひなしても戀しきは

またの逢瀬ぞ急がるゝ

心は同じ西東

六年あまりの古事を

逢ふを別れの始めぞと

其かみ人ぞうらめしき

恨みはやがて逢ふ折の

此年月を過さなむ

月もみ空にゆきめぐり

闇の夜のみは非れば

都

人もさこそと頼むなれ  
君にしあれば幾年も

故郷

距てぬ友と今宵しも  
語るもうれし東路の

都

君は何處に今いかに  
白川の水凍る夜も

故郷

歌留多に更る夜と共に  
遠き旅寐の小夜衣

都

幾度君やしぼるらん

人もさこそと頼むなれ

頼まれぬ世に頼むべき

めで玉ひてしためとして

積る思の數々を

君はいづこに今いかに

阿蘇が峰を吹く朝も

ささくてまよと思ふなり

去年のむつきを忍びつゝ

幾度君やしぼるらん

我子の旅路に出でし上



雁の行衛に打見ても

吾古里のなれ衣

故郷

旅路ならねど旅衣

結ぶは今宵初草の

うら珍らしき夜の襟を

見せんよすがのなきぞうき

都

見せんよすがのなきぞうき

同じ衾に二人して

懐しき文の御返しに

筆とりかはすはらからを

故郷

君が手馴の文机に

わりし面影恣ひつゝ

一夜を千代と語りあかさん

一夜を千代と語りあかさん

都

一夜を千代と語りあかさん

一夜を千代と語りあかさん

御返し文かさはてゝ

恐ぶにあまる母の身を

新年梅

不盡廼舍

霞まがへる

天つさざりの

御空も匂ふ

初日のかげに

霜をあざむく

たい一輪の

それよこの花

春べし知らぬ

お正月

事の始めの

お正月

いざ羽子つかん

いもとよ友よ

いざたこあげん

おとよ友よ

軒端の梅は

ささがけぬ

霜に堪へたる

その花の

清くをしく

け高き装ひ

心にかざし

身につちまとい

初日はつひのかけに

かほるらん』

二見か浦

東 久米子

横雲よこぐもわかれて

今いまぞあくる

二見ふたみか浦うらわの

朝あさのみそら

波なみのく句くまへる

霞かすみわけて

豊とよさか昇のぼるや

初日はつひの影かげ

七福神

小林恒子

樂たのしき天あめのみ園そのより

この世よの幸さいはひをもたして

年としの始はじめにはらくと

たからの神かみの七ななはしら

降くだり来きませるよき日ひを

空みやものどかにかまつゝ

たふたき恵めぐみとことには

かはらぬ春はるの千代ちよ八千代ちよ

新年五首

佐々木信綱

船中新年

妻子らと屠蘇の酒くまず五たびの

春にしわひぬ舟の上にして

山上新年

むら山の高きにのほり見さくれは

ひびがしの海ゆ初日出むとす

田家新年

都より歸りし子らともろともは

年はささけをくむわした哉

旅中新年

はかなくも年を迎へてさすらへの

我身かなしき旅すかた哉

書窓新年

ふるき書つみかさねたる文机の

わたりはき清め年を迎ふる

新年

吉敷要

いとし子に去年のまゝなる衣着せて

さひしき年を迎へける哉

万歳のすてつゝみして歸りゆく

門邊さひしき白梅の花

賤か屋も玉のうてなも初日かけ

同じ光にとしたちにけり

あづけたる里子も家にかへり來て

年の初春にきはしきかな

初日さす豊明殿の南の

みさりに匂ふ梅の初はな

雑詠五首

石樽千亦

鮒つりて矢ばせに急ぐむしる帆の

帆の上斜に夕日さすなり

芒かくれ駒にむちうつ蝦夷人か

けつらぬ髪にあられふるなり  
はたご屋の火鉢圍みて道すから

なづみし雪を語りあふ哉

丸木橋をちて朽ちたる谷川の

をちの笹生にうくひすの鳴

稻の上に幼子のせて里人か

馬追ひ歸る野路の夕くれ

折にふれて

西升子

富士のねのみ雪はこそまゝなから

あらたまりても見ゆるけさ哉

いたつらに老にし影を若水の

かゝみに見るも耻かしきかな

うつみ火のあたりはなれぬ老の身も

花に遊はん春は來にけり

しほけふり空にかすみて伊豆の海や

遠つ嶋ねも春たちにけり

見るかけもなしと思ひし賤か屋の

はひりのやふに鶯のなく

その折々

村山元子

重き荷をあへさ引くこそあはれなれ

うしとは誰か名つけ初けむ  
いもうと、共に遊ひし古里の

野邊は昔にかはらさりけり  
母君のたちぬいまし、我袖を

露のやとりとなさじとを思ふ  
玉川の流の末を酌む人の

心も玉にすすよしもかな  
ぬふ針もいつしかやめて幼子の

眠れる貌をまもりぬる哉

遣羽子に上手盡すや姉妹

書初や太郎冠者のたのもしき

年禮の繪端書多き机哉

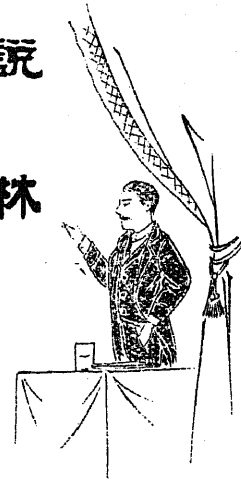
長幼序ありみつ置たる屠蘇の盃

愛 櫻 涼 月 船 村 二 樓

御手植の松の梢や初旭影  
追羽子の行衛や庭の寒紅梅  
萬歳や家毎梅咲く村に入る  
蓬萊の米こぼれたる疊か那  
元朝や左右に開く金襖  
本箱に元旦の詩を題すか那  
三尺の庭の初日や谷の菴  
遣羽子の群に入りけり屠蘇の醉  
庭に積む雪見ながらの年酒哉  
万歳や戸口に烏帽子落んじす  
子女多き家庭の春や羽根手鞠  
居催促初雞聞てかへりけり  
猿引の頭巾冠りし小猿か那  
初日の出參賀の馬車の轡きけり  
遣羽子や洛陽の公子兵に堪えず  
落したる羽子雞の啄みけり  
羽子それてあれと云はんも垣隣  
庭先や羽子つく夫人身重なる

杏子 鷓鴣 芝水 鬼水 郊外 移雪 武骨 笛水 直哉 石文 菰堂 木公 松軒 龍鼓 夜月 圓係 春子 聽瀟

# 説林



## 女子教育談

嘉納治五郎

一体男と女といふものは、較べて見ると頗る  
 違ふ點がある。先づ第一に男は、子を産まないが  
 女は子を生む、従つて身体の具合も、女は男と違  
 つて子を生む様に出來て居り、男は乳が出ないが  
 女は乳が出る、そこで以て本來女は其乳で以て子  
 供を養育して行く様に出來て居る。尤も今日では  
 牛乳で育て、行く様なこともあるが、母親の乳が

よくさへあれば、母乳で育てるのが本來である。  
 だから女といふものは、本來家庭に居つて子を  
 育て、行くといふのが天職である。即家庭に居つ  
 て内政を整理し、子供を教育して行くのが役目で  
 ある。併し悉くの女が皆そうすべきだとは云はぬ  
 無論多數の中では醫者になるのも宜からう、教師  
 になるのもよからう、其他それ／＼公役に付くの  
 もよからう、殊に教師などは最も適當したものだ  
 らうと信じる。けれども大体からいふと女といふ  
 ものは、多くの點に於て家庭に於て働く様に出來  
 て居るのであるから、家庭の仕事をするのが、本  
 來だと思ふ。即家庭に在つて内事を整理し、夫が  
 外に出て働く時に、内顧の憂なからしめると同時  
 に、夫が外に在つて、思ひ屈して歸つても來た  
 時などは、夫を勵まして更に新しい知恵を授け工

夫を興へてやるといふ様でなければならぬ。

そうすると、人は、女といふものは一向つまらぬもので、少しも獨立的に價値のないものである。夫を助ける丈で自分で働く事がないのだから、まことに低い位置の者だと考へるかも知れないが、夫は大變な間違である。夫の非常な働が、其爲に出来るのだと思へば、すぐ分る咄しである、例へば、心理學の助けで教育學が成り立つて居るからといつて、誰も心理學が日蔭にあつて價値がない、獨立的の位置のないものだとはいはないと同様である。

従つて家庭にばかり居るのだからといつて、男が女を奴隸の様に見る様なことは無論出来ぬ。夫は、何方か上かといふと男は家長として上に立つ、其理由は、何人でも男の方は強い、身体の組み立

てにしても男が強いし、腦力の働かしてしても勝つて居る。だから男は女の上に立つのは普通である。女は弱いから、そこで以て男は之を助けてやらねばならぬ。女は脊が低いだから、物を見る時などは女を前にやつて自分は後に立つ、道を歩くにも男は強いから女の爲に重い物を持つてやる、車が一臺しかなければ自分は歩いて女を乗せてやる。そこが即昔と違ふ所なので、昔風で見ると、男が強いからといふので、何でもこんな事は女にさせて男はたい懐手で以て歩くといふ様なのであつたが、今日は夫では行かぬ。

女の方から考へても、こうなるのが得である、何も男女同權などと男と肩を并べて對抗するに及ばぬ、咄しなので、試みに一家の中に主人と同様な者が二人あるとすれば如何、丸つきり治ま

りかつくものでない。だから一家の治まりを付け  
るには、どうしても、こうでなければならぬ。の  
みならずこうなると一方から見れば反つて女の方  
がエライのかも知れぬ。男は始終外に出で、働く  
女は内に居て参謀になるといふのだから、言は、  
男が女の手先きとなつて働く様なものである。

これで以て見るも、女といふものはどうしても  
學問がなくてはいかぬ。夫が家に歸つて相談をす  
る、すると女は夫に向つて或る知慧を授けねばな  
らぬのだから、無論男ほど専門的に深い學問とい  
ふのではないが寧ろ 廣い關係に於て夫の職業に  
關する智識といふものを、十分持つて居らなければ  
ならぬ。

そこで女子教育といふものも、大体右の様の方  
針で進んで、到底は男子と同等の程度まで進めん

ければならぬ。勿論今日まで甚だ低い程度に在る  
ものを今俄に高くするといふ譯には行かぬ。併し  
漸次と其歩を進めて行くべきものだと思へる。

上は過般嘉納生先が記者に語られたる意見の主要なり。校  
合を經たるにあらざるを以て、文字の誤は筆者の責さ知られ  
たし

ニユーイングランド

の一家庭

松本亦太郎

一とつぶの種子が地に落ちると芽が出る、其芽  
が段々成長して松や杉のやうな棟梁の材になるか  
ならぬかは、其種子の中に具有されて居つた本來  
の性質と、其種子が落ちた處の外圍の境遇即ち  
土地の肥瘠、日光の流通、空氣の否良、水分の多  
少により定まつて來るのである。一の家庭が

社會に出来る有様は、丁度種子が地に落ちたやうなもので、其家庭が善美なる家庭になるかならないかは、第一に其家庭を捨てたる人々の本來の性質如何により、第二に其家庭の存在する土地の有様及社會の状況如何により定まつて來るので、家庭と社會と相互働き合ふ所から、家庭の幸福なる生命が湧き出て來るのである、それであるから一の家庭を観察しやうとすれば、勢い是等の點を探つて見ねはならぬ、併し人間の性質、社會の状況といふやうなものは突如として湧き出るものではない、夫々相當の來歴があつて形成するものであるから、溯て此來歴を尋ぬる事も亦必要である」

自分が茲に語らうと思ふ家庭は、是は架空の家庭でも無ければ、理想の家庭でも無い、曾て海外に流浪して居つた項に偶々目撃したる家庭であつ

て、而かも其家庭の中に自分も一年許り住んで居つた事があるのである、其家庭はニューヨークに在つたのであるが、ニューヨークと云ふのは北米合衆國の東岸で、大西洋に面して居る北の方の狭い一帯の土地を指して云ふのである。一合衆國の人民は諸國民入り交りであつて、今日では凡そ世界中の重なる國民で合衆國に住んで居らない國民は殆んど無と云ふつてよい位である。處々方々の國民が斯の如く合衆國に這入り込んで來た目的は種々雑多である、或は領土を廣むる爲めに此國に來たものがある西班牙人の如きは即ちそれである、或は佛蘭西人の如く、此國のまだ手の付けない豊饒なる土地を耕やさうと云ふ考で入り込んで來たものもある、或は新開國に商賣をして一攫千萬金を得やうと云ふ積りて遣つて來た



のもある、和蘭陀人の如きは即ちそれでゐる、又近來になつて 亞米利加の垢を洗ひ落とし、其垢水を變して黄金に化さうと云ふ考で、至る所に洗濯屋を開いて居る支那人の如きもある、さう云ふ次第でどれもこれもなかく欲張つた目的でもつて、此新開國に入り込んで来て居るのであるが、茲に夫等と全く異つた、一種妙な目的を有つて此新世界に移つて來た國民がある、夫れは即ちイングラントから來た國民である。

英國といへば今日では歐洲諸國のうちで文明の理想に最も近く達した先進國で、其國躰から云つても最も立憲的で、政治宗教の自由などに於て歐洲諸國中英國の右に出づる國は無いと云つてよい位である。處が十七世紀の初頃の英國と云ふものは壓制暴逆の輓の下に苦んで居つたので、政治及

良心の自由と云ふものは固より剝奪されて居つて人權なるものは暴君主の足下に蹂躪されて居つたのである、敢て時世の非なるを慷慨し、政治宗教の自由を得んが爲に力を致す者の如きは、之を囹圄に繋ぎ、之を首刎ると云ふ有様であつたから、志ある人の中には英國に住むのを危うしとし、和蘭陀あたりに亡命の客となつて一時身を潜めて居つたものもあつた。夫等亡命客中に人は己が良心の命するところに從て直接に神を崇拜する權利を有つて居る法王とか監督とか云ふものに指命を待つに及はんと云ふ事を主張した爲めに英國より放逐された一連があつて、其人々はロツトルダーム及ライデンあたりに住んで居つたが、星霜推移るに從ひ英王の壓制は益募り、いつまでたてば本國に歸る事が出來ると云ふ見込はなし、然りとて

永く他國に流寓するも是といふ望もなしと云ふ處から、此一連の人々は、大に茲で奮發蹶起し、其住み慣れたる舊世界を棄て、遙々大洋を越えて、舊慣故格なく、人跡さへ稀なる清淨潔白の新天地に移り心の靈明を切磋琢磨し不羈獨立なる自由の生涯を送らんと志を立てたのである。

北歐と北米とは三千數百海里ある、今日では汽船の來往が頻繁で、急行の船ならば六日間で太平洋を渡る事が出来る、併し太平洋に比らべると波濤は餘程荒い、メキシコ灣から北氷洋の方に流れる潮流があつて其潮流の範圍内に於ては随分暴風雨に逢ふ事が多い、自分は三度はかり太西洋を渡つた事があるが一萬五千噸位の汽船に乗つて居つても毎も、二三日間は随分動搖が甚だしくつて怒濤甲板を拂ふ事が度々であつた、彼の亡命客の

一群が此太西洋を渡つたのは、西曆千六百二十年頃であつて勿論漁船の便などはない、メイフラワ―と名くる僅か百八十噸の木船に四十一人の移民と其家族が乗組んで漂然此大洋に浮んだのである。我に自由を與へよ否らざるば死を與へよと云ふのが他日北米國民が獨立戰爭をなす時の警語であつたが、夫れは即ち此メイフラワ―の一群の男女の精神であつたのである。三軍の帥は奪ふ事が出来ても匹夫匹婦の志はなかく奪ふ事が出来ない。此メイフラワ―の一群は風濤の難と戰つて長日月の後遂に太西洋の彼岸に達したのである。

一昧アングロサクソン人と云ふは、極めて粘り強い性質を有つて居る人種で、一寸見ればグズグズして居る様であるが、困難に逢ふと益不屈不撓の精神を喚び起こして、盤根錯節に逢ふ毎に

愈<sup>いよ</sup>其<sup>その</sup>心<sup>こころ</sup>の銳<sup>えい</sup>利<sup>り</sup>なる所<sup>ところ</sup>が現<sup>あら</sup>れて來<sup>きた</sup>る人<sup>じん</sup>種<sup>しゆ</sup>である。

斯<sup>かく</sup>の如<sup>ごと</sup>き人<sup>じん</sup>種<sup>しゆ</sup>であら、メイフラワ一の一<sup>いっ</sup>群<sup>ぐん</sup>は新<sup>しん</sup>世界<sup>せかい</sup>に上<sup>じやう</sup>陸<sup>りく</sup>しても他<sup>た</sup>の移<sup>ひ</sup>住<sup>ぢゆ</sup>民<sup>みん</sup>の如<sup>ごと</sup>く氣<sup>き</sup>候<sup>こう</sup>の温<sup>おん</sup>和<sup>わ</sup>なる所<sup>ところ</sup>や、土<sup>ど</sup>地<sup>ち</sup>の豊<sup>ゆた</sup>饒<sup>たか</sup>なる所<sup>ところ</sup>に住<sup>す</sup>んで安<sup>あん</sup>樂<sup>らく</sup>の生<sup>せい</sup>涯<sup>がい</sup>を送<sup>おく</sup>らうとは希<sup>まれ</sup>はない、却<sup>かへ</sup>て寒<sup>かん</sup>氣<sup>き</sup>の甚<sup>はな</sup>しい、土<sup>ど</sup>地<sup>ち</sup>は山<sup>さん</sup>澤<sup>たく</sup>で荒<sup>あ</sup>れ果<sup>は</sup>て居<sup>ゐ</sup>る太<sup>たい</sup>西<sup>せい</sup>洋<sup>やう</sup>東<sup>とう</sup>北<sup>ほく</sup>岸<sup>がん</sup>の一<sup>いっ</sup>帯<sup>たい</sup>の地<sup>ち</sup>を撰<sup>えら</sup>び、之<sup>これ</sup>をニユーイングランドと名<sup>な</sup>け已<sup>おの</sup>等の住<sup>す</sup>み場<sup>ば</sup>處<sup>と</sup>と定<sup>さだ</sup>めたのである。づつと北<sup>きた</sup>の方<sup>ほう</sup>であるから一年<sup>いっ</sup>年<sup>ねん</sup>の内<sup>うち</sup>氷<sup>ひやう</sup>雪<sup>せつ</sup>の時<sup>じ</sup>節<sup>せつ</sup>が長<sup>なが</sup>い、沼<sup>しやう</sup>澤<sup>たく</sup>が多<sup>おほ</sup>いから瘡<sup>しやう</sup>癩<sup>れい</sup>の氣<sup>き</sup>に犯<sup>か</sup>され病<sup>びやう</sup>に罹<sup>か</sup>るものが多い、不<sup>ふ</sup>毛<sup>もう</sup>の土<sup>ど</sup>地<sup>ち</sup>であるから饑<sup>き</sup>飢<sup>き</sup>に苦<sup>くる</sup>しみ、明<sup>めい</sup>日<sup>にち</sup>の食<sup>しょく</sup>物<sup>ぶつ</sup>をどうして得<sup>え</sup>たら善<sup>よ</sup>からうと思<sup>おも</sup>ひ煩<sup>わづら</sup>ひつゝ、眼<sup>み</sup>に就<sup>つ</sup>いた夜<sup>よ</sup>も數<sup>かず</sup>々<sup>々</sup>あつたと云<sup>い</sup>ふ事<sup>こと</sup>である。

此<sup>この</sup>一<sup>いっ</sup>群<sup>ぐん</sup>の男<sup>だん</sup>女<sup>にょ</sup>がニユーイングランの開<sup>かい</sup>拓<sup>たく</sup>に勞<sup>ろう</sup>働<sup>どう</sup>して居<sup>ゐ</sup>る間<sup>ま</sup>に、本<sup>ほん</sup>國<sup>こく</sup>の状<sup>じやう</sup>態<sup>たい</sup>は如<sup>い</sup>何<sup>か</sup>になつたかと云<sup>い</sup>

ふと、チャールス王<sup>わう</sup>の專<sup>せん</sup>横<sup>ぎやう</sup>は益<sup>ます</sup>甚<sup>はな</sup>しくなつて議<sup>ぎ</sup>會<sup>かい</sup>は數<sup>かず</sup>々<sup>々</sup>開<sup>ひら</sup>散<sup>さん</sup>せられ憲<sup>けん</sup>法<sup>ぽう</sup>も宗<sup>しゆ</sup>教<sup>きやう</sup>の自<sup>じ</sup>由<sup>ゆう</sup>も滅<sup>めつ</sup>茶<sup>ちや</sup>くくに蹂<sup>じゆう</sup>躪<sup>りん</sup>され、天<sup>てん</sup>日<sup>にち</sup>爲<sup>な</sup>るに暗<sup>くら</sup>しと云<sup>い</sup>ふ様<sup>よう</sup>な次第<sup>だい</sup>になつて來<sup>き</sup>たのである、此<sup>この</sup>暗<sup>くら</sup>黒<sup>こく</sup>時<sup>じ</sup>世<sup>せい</sup>に一<sup>いっ</sup>條<sup>じやう</sup>の光<sup>こう</sup>明<sup>めい</sup>となり、人<sup>じん</sup>意<sup>い</sup>を強<sup>つよ</sup>うしたのは彼<sup>か</sup>のメイフラワ一<sup>いっ</sup>群<sup>ぐん</sup>男女<sup>だんにょ</sup>の志<sup>し</sup>であつた。この一<sup>いっ</sup>群<sup>ぐん</sup>が自<sup>じ</sup>由<sup>ゆう</sup>の天<sup>てん</sup>地<sup>ち</sup>に移<sup>うつ</sup>り新<sup>しん</sup>英<sup>えい</sup>國<sup>こく</sup>を建<sup>けん</sup>立<sup>りつ</sup>しつゝ、あると云<sup>い</sup>ふ風<sup>ふう</sup>説<sup>せつ</sup>が段<sup>だん</sup>々<sup>々</sup>英<sup>えい</sup>國<sup>こく</sup>に傳<sup>つた</sup>つて來<sup>き</sup>たものだから、夫<sup>そ</sup>れに勵<sup>ほげ</sup>まされて志<sup>し</sup>ある者は我<sup>われ</sup>もくゝと新<sup>しん</sup>世<sup>せい</sup>界<sup>かい</sup>移<sup>うつ</sup>住<sup>ぢゆ</sup>を企<sup>くわ</sup>て、續<sup>ぞく</sup>々<sup>々</sup>隊<sup>たい</sup>を組<sup>く</sup>み大<sup>たい</sup>洋<sup>やう</sup>を越<sup>こ</sup>えてニユーイングランドの土<sup>ど</sup>地<sup>ち</sup>に渡<sup>わた</sup>つて來<sup>き</sup>た。是<sup>こゝ</sup>等<sup>ら</sup>の移<sup>ひ</sup>住<sup>ぢゆ</sup>民<sup>みん</sup>は曩<sup>なま</sup>に來<sup>きた</sup>つたメイフラワ一<sup>いっ</sup>の一<sup>いっ</sup>群<sup>ぐん</sup>の如<sup>ごと</sup>く食<sup>しょく</sup>いものではなかつた、其<sup>その</sup>大<sup>たい</sup>部<sup>ぶ</sup>分<sup>ぶん</sup>は社<sup>しゃ</sup>會<sup>かい</sup>の中<sup>ちゆう</sup>流<sup>りゆう</sup>以上<sup>いじやう</sup>に位<sup>くら</sup>る敢<sup>かん</sup>爲<sup>ゐ</sup>の有<sup>いう</sup>業<sup>ぎやう</sup>者<sup>しや</sup>で、なかには大<sup>たい</sup>地<sup>ち</sup>主<sup>しゆ</sup>、財<sup>ざい</sup>産<sup>さん</sup>家<sup>か</sup>もあり、熱<sup>ねつ</sup>心<sup>しん</sup>なる宗<sup>しゆ</sup>教<sup>きやう</sup>家<sup>か</sup>、ロンドンで腕<sup>うで</sup>利<sup>り</sup>きの法<sup>はふ</sup>律<sup>りつ</sup>家<sup>か</sup>などもあつて、オクス

フオールド大學出身の有爲なる青年學者も混して居つたのである。是等の人々は地上の俗慾を満たさんが爲めに來りたるにあらざり或は冒險の好奇心に驅られて來りたるにもあらず、只管良心の獨立を得て信教の自由を全うし飽まで眞理を探索し且つ之を實行せんが爲めに其祖國を去つて此新開の土に來つたのである。此新開國に移つて來た他國人中には無頼漢、山師、犯罪人、及本國に於て身代限などをした者が多かつたので、そう云ふ人間のそこゝに徘徊して居るなかには是等英國人の一群が來たのは恰も萬綠叢中に一點の紅花咲ける如き有様があつたのである。他日自由平等の爲めに英國の暴政府と戦ひ或は奴隸制度廢止の爲め、南部諸州と戦ふが如き、人道の大義を明にする大運動は多く此ニエーイングランドが中堅になつて始ま

つたのである。

英國からの移民がニユーイングランドに土着するや、衣食住の具、未だ備はらざるに當て、夙に企てたる事業がある、彼等は勤勞の効により得たる僅かの収獲中より幾分つゝの貯をなし、之を以て學校を興し、教會を建て始めたのである、一身を犠牲にして世の中の爲めに働く自主獨立の人物を養成すると、宇宙の大道を探究尊崇するとの二つが是等の學校教會の目的であつたのである。ハワード及エール兩大學の如きはあらゆる方面に於て北米合衆國の柱石になる人物を續々輩出せしめて居るが此兩大學は實に此困難の最中に産まれ出でたので、ニユーイングランド移民の熱血が其源泉になつて居る。斯て世の變遷に従て此移民の創立したる學校及教會は、漸次發達してニユ

ーイングランド人を陶冶したから、ニューイングランドには一種の氣風が養成されて、至て品位の高い、敢爲の氣象に富んで居つて、而かも溫良の徳を備へて居る人物が、澤山に出来るやうになつたのである。

英語に「ミスター」と云ふ言葉がある、男子を呼ぶ時に用うる敬稱であつて誰サンとか、誰君とか云ふ様な意味の言葉で誰に對しても之を用うる事が出来る。新聞記者が己の國の宰相や大統領の事を書く時「ミスター、グラッドストーン」ガ云々、或は「ミスター、マッキンレー」ガ云々と書く、少しもおかしくないのみならず、ミスター某と呼はるゝ時は呼ばれたものは大層自分が尊敬されたと云ふ様な感じが起る。日本の新聞記者が若し其紙上に改まつて書く場合に、桂君が昨日議會で云々とか、伊藤サ

ンが露西亞で云々とか云ふ様な風に書いたらは少しおかしく聞こへる、矢張り眞地面な場合には桂總理がどうか、伊藤侯爵とか云ふ言葉を用ゐねばならぬ、朋友知己の間に普通に用ゐられて居るサンとか君とか云ふ語を用ゐては、伊藤侯爵桂總理を十分に尊敬する事にならぬのである、君とかサンとか云ふ言葉よりも侯爵とか總理とか云ふ肩書の方が尊い様に人々は感するのであらう。英語ではさうでない普通人に對して用うる「ミスター」と云ふ語が、動もすると總理とか大統領とか云ふ肩書よりも尊く感ぜらるゝので、時によると「ミスター大統領」ガ云々、「ミスター議長」云々などと云ふ様に、肩書の上に「ミスター」を加へねば失禮に當る事があつて、ミスターと云ふ語が其様に尊い意味を有つて居るのはどう云ふ譯であるかと尋ねると、ミスタ

一と云ふ語にはゼンツルマンと云ふ意味があるからである。語原に斯ふ云ふ意味がある譯ではないが、實際に於てゼンツルマンと云ふ者がミスターと云ふ語に含まれる様になつたのである。ゼンツルマンは立派に品格の具はつて居る君子の人となりと云ふ様な事を顯はす語である。それであるからミスター誰々と呼ぶのはゼンツルマン誰々と云ふのと同じで、君子の人と成りと云ふ資格は人間の天爵であつて、大臣とか大統領とか云ふ様な一時限りの人爵と比らべると遙に尊い、道德的に貴い價値があるから、ミスターと云ふ稱號が英語界に於て頗る重きをなすに至つたのである。此ミスターと云ふ語を他國の語に譯するのが六ヶ敷い、君と譯してもサンと譯しても當らない、士でもマヅイ、獨逸語のヘル、佛語のモシエー、以

太利語のシニョーレ孰れも恰當しない、是れは國々により理想が違ふからである。例へば日本では昔は、人は武士と云つて理想的男子は士であつたそれだから男子を尊稱するに『との』と云ふ語を用ゐた、とのと云ふは士の住んで居る家とか屋敷とか云ふ様な意味であらう。其如く獨逸の理想的男子はヘルと云ふ語でよく顯はす事が出来る、處が英國の理想的男子はゼンツルマンである、ゼンツルマンは英國が本場で、他國では見る事が稀れである標式を具へて居るゼンツルマンを英國に於て見る事が出来る、ケンブリッヂ、オクスオールド兩大學の如きは此ゼンツルマンの養成所である、其ケンブリッヂやオクスオールドから系統を引いて居るハーワート、エール兩大學は又新英國に於けるゼンツルマン養成所になつたのである。さうい

ふ次第であるから頗る立派なるゼンツルマンの標式を具へて居る人物は世界の内で北太平洋の兩岸に相對して居るオールド、イングランとニエー、イングランの兩所に於て最も多く之を見る事が出来るのである。此ゼンツルマンは一面から見ると極めてホーム的の性質を具へて居る、善美なる家庭の成立つには此ゼンツルマンが一の主要素になる事が必要である、(續く)

娛樂の選擇

佐方鎮子

凡そ生きたし生けるもの何者か楽しみながら、山を走る獸、空を翔る鳥、もしくは水に住む魚の類に至るまで各々其の生活の状態と食餌の種類とに應じて之を満足せしむる傍、樂む處なくんば

らず。さればこそ花にたはふれ月に謠ひて、優に其の天然の性情を遂くるとを得るなれ。心なき禽獸蟲魚にして已に然り、況んや天地秀靈の氣を受けて靈智靈能を有せる吾人々類をや。故に富貴に生れて高樓大厦に住み、綾羅を着錦繡を茵とするあたりは勿論、風雨寒暑を厭ふのいとまなく齷齪として其の務に従事する類より、僅に茅屋に住して雨露を凌ぎ、終日勞働に服して一杯の飯一壺の酒を得る輩に至るまで、皆それく樂む處あり、以て艱難をも辭せず、勞苦をも厭はず、各々其の分に應じたる業務に従事し、或は神心を惱まし、或は筋骨を勞し營々として倦むことなく、以て其の老年に趣くを知らざるに至るなり。若しそれ毫も樂む處なく、望む處なくんば何を以て身を勞し心を苦めて其の業を營む者あらんや。故に絶望の

淵に沈める人は、往々世を厭ひて或は身を深淵を沈め或は生を白刃に絶つ等悲惨の行爲を敢てして却りてこれを以て其の憤怒の情を慰め、其の憂鬱を救はんとするものあるに至る、是れ他なし、其の人の運命可ならずして愉樂と希望とを奪はれたるに因らざるばあらず。これによりて觀る時は、人世業務の大半は望と樂とによりて成し得らるゝものなるを知るべし、而して其の好惡に至りては、位置と境遇とによりて同しからず、又其の人の性質によりて大なる相違を生ずることを免かれず、或は官爵位階の高からんことを望み之を得るを以て樂みとするものあり、即ち人爲の名譽を荷ひ、人のために崇敬せらるゝを以て樂みとするものなり、或は其の家の富まんことを欲し、これを以て樂みとするものあり、即ち耳目鼻口の慾

を極むるを以て樂みとするものなり、或は名譽を得んことを欲して一向其の事にみにつとめ、これがためには往々其の事の利害得失を忘れて只人の賞賛を得んことを希ひ、僅に市童の憐を得てこれを以て樂みとするものあり、其の他何といひ彼といひ、千差萬別なりといへども各々其の好む處に従ひて樂むに外ならず。これが中にも肉体の樂みあり、精神の樂みあり、肉体の樂みは多くは淺薄卑猥にして精神の樂みは大方高尚なる品格を有す、その種類は勿論各人の好尚によるべしといへども然も自注意して勤めて卑猥の事を避け或は他よりの勸導教導によりて高尚なる物を翫ふときは、知らず識らずのうちに其の精神をして高尚なる域に進ましめ、従て其の風采も亦おのつから上品ならしむることを得べし。故に娛樂は實際に無益なる



が如きも、能く其の關係を思考する時は決して輕易すへきものにあらざ、且つ戸外の遊戯の如きは頗る有益なるものにして、常に其の技に長じて娛樂を満足せしむるのみならず、身体の健康を増進するに於て、其の効決して少からざるものあるなり。

方今我國に於て女子に適するものとして行はる遊戯の種類を擧げんに、戸外遊戯に於てはロケットニス、クリックツト及び從來年始の遊びとして概はるる處の手鞠、羽子の類の如き、何れも身体各部を適度に使用發達せしむるに於て大なる効力あることは勿論、娛樂として又興味を有すること少からず、此の他弓術馬術の如き又女子の學ひて以て快樂を取るへき處のものとして、游泳漕舟の技の如き當時識らざるものなしといへども又以て体

力を進め愉快を取るに於て女子に適せる遊戯ならんか、是等みな精神を爽快にし快活の氣象を養成するに於て、其の効必ず著しきものなるべし、戸内の愉樂に至りては、昔よりその種類に乏しからず、彼の香道、點茶、活花の如き一の儀式として行はれたるものなれども、もとみな娛樂の目的より出でたるものにして、傍はらに會するものをしてかゝのづから鄙吝の情を去りて、高尚なる志操を有せしむるに至る、實際の具として、及び精神修養の方法として大なる益あるを見るべし、其の他音楽、詩歌及び書畫の如き、何れも高尚優美なる樂みとして其の効果一層大なるものあるべし。又他人の藝術技能を見聞して喜ぶ處のもの、即ち觀劇、軍談、小説、手品等種々あれども、是等は前の物に比すれば、大に其の選を異にし、利害得

失交々同しからざるが故に頗る注意せざるべからず。

これを要するに嗜好娛樂は人間に免かるべからざるもの、否寧精神の滋養物として必ずあらざるべからざる所のものなり、只其の種類の選擇探定に至りては大に謹まざるべからず即ち高尚なる娛樂は、これを好む人の精神をして高尚ならしめ、卑猥なる遊戯はこれを樂む人をして知らず識らずのうちにおのつから卑下なる情を起さしむ。然るに世人常にいふ只娛樂のみ只遊戯のみと、これを蔑視して毫も顧みる處なし、此の如きは思はざるの甚しきものにして、これかために或は身体を害し、或は不正不義に陥るものあり、娛樂の事又忽にすべからざるを知るべし。

## 寄書



お正月の小供

西武 むなかも

鬼は外福は内わゝ！。惡魔をきれいに外に逐ひだして、それから喜んで福を内に迎へるのだ。之は都も鄙も上下通じてお正月の家庭の面白くも可笑くも樂しくも嬉しくもある處である。一体が家庭に於ては笑ふも泣くも喜ぶも怒るも、やつぱり其基はみんな眞實眞味の幸福ではあるが、まして此家庭のお正月に、去年の鬼もにこ〜と笑うて禮にくるといふ時、彼等の目には花の色、彼等の耳には鳥の聲、其他には彼等の目と耳とを遮るも

の、ない、その天真なる、その爛漫なる、且は其  
 無邪氣な小供の天地こそ、誠に一層のお正月の賜  
 であらう。恐らくは吾も人も皆之を屠蘇よりも餅  
 よりも、若しくは又晴着よりもお禮よりも喜ぶ事  
 である。さればこゝにその天地の一節二節にても  
 伺ひ、それで皆様と共に此樂しきお正月をお祝ひ  
 申さんかな。

とつちちゃん！。ねーとつちちゃん、もう坊は目が  
 覺めたよ。之でやう／＼する三つもあしたも寝て  
 起きたのだねー。あれ！。誰か門をたたく。此  
 早くに誰だらう？。さうだお正月様だ。坊が戸を  
 わけてやる。とつちちゃん。坊はもう起るよ。お正  
 月様が待ち遠ふだからねー…………。

ねーちちゃん。お正月様はどなたなの。けさ一番  
 早く来たのは東のねちさんなのに、お正月様はい

六十八  
 つくるのかしら。獨りでくるの。誰かにねんぶし  
 てくるの。花ちゃんか誰かいわの近所で止めざり  
 にしてよこさないのではないか。一寸行つて見て  
 こやうかしら…………。

ばあやー。私はまだお雑煮なんかは喰べたくは  
 ないのよ。いまにお正月様とお客事して喰べるの  
 ねー。お正月様はおかちゃんもつてくるつてよ。赤  
 い餅や黄ろい餅を松葉にさしてとんでくるつて。  
 うれしいことねー…………。

おちいさん。お正月様はもういくつ位になるの  
 です。男ですか。書初を見て誰のを一番はめるで  
 しゃう。あの大きい松竹梅ですわねー。あれは全く  
 上手なもの。おちいさん。私はほんとに誰れにも  
 助けて貰ひなんかしないわ…………。

かーちちゃん。あーさひにかがやくひーのまるの

はた。ねー松竹たーて、門毎になの。これから學校でみんなして歌ふのだよ。今日が一番おめでたい日だつてさ。だから今日は學校でみんなしていいねいにお祝ひ申すんだわ。あらかーちやんまた忘れたの。歸つたらおぼさんのとこへも、ふともだちのとこへもお祝ひに行くんだわねー……。

どんな偏僻の田舎に於ても、小供があれば黄金も玉も何物ぞ。此明治の御世に處しては此樂しみは充分に樂しみ得らるゝのである。(元)

### 秋田市正月の名物

#### 河井たま子

名物と申したのは正月の行事の一としてかそへられて居る万才をさしたのであります。万才といへばどこの國にも行はれる事でありすが此所に名

物といふは他の地方と余程趣がちがつて居るからであります

正月四日五日の頃より廿日ごろまで行はれるのであります。何所の家でも万才に對する家例があつて日どりも之れによりて一定して居ります。或家では四日とか或家では五日とかそれ／＼さまつて居ます。其日に万才をよんでそれ／＼まわするのであります。万才をよぶ日はその家の云はゞ新年宴會なので親類縁者を招ぎ酒宴をはるのであります。

万才は三河万才と同じく大夫才造の二人が例の裝飾でやつて來るよんだ家ではまづこれを客室の中席位の處にすねるのである。新年宴會の事であるからなるべくは夕方にしたひのであるが万才の方の時間の都合によりそう行かない大抵は万才の方の時間の都合により此方の時間をさめるのであ

る席定まるや次の如きもん句を歌ひながらまひ初めるのである大夫は扇をかざして才造は鼓を打ちながらまうのであります而して其文句の節は「のりと」の様なもので三河万才のやうな下品下作な物ではないなかゝ上品なしかも春めかしい面白ひ感起さしむるものである而してそのまひ歌に十二種ある其内神力万歳といふのは次の如くです  
 御万歳とふやありがたかりける神力のきすいも  
 新にればはします、切ては貴き日の本の御宮社堂  
 の始りには昔御おんやの其時は伊弉諾伊弉册の  
 二人の御神は天降らせ給へば天照大神たてにつ  
 き初めて日本をとり立たせまへば其後神功皇后の  
 御對陣に蓬來の三漢をばせめはるばせ給へば  
 八幡山には跡をたて弓矢神とも云はれたれば天  
 には日月下は堅牢地神海底には大龍王川に水神

ましませば魔王住むべき所もなし悪魔や外道  
 終りなうゝ八剏熱田大明神は御内神の柱の數  
 を四十八本にきめきめたまへば西方にかしたて  
 のみと手斧を御手に持て千歳やれや萬歳やれや  
 萬歳くゝと打拂は屋根の檜皮の二重たるき結構  
 はにんくゝ二枚のこまへなれば玉理殿にかり天  
 井御成殿にごふ天井人家の數は數知れず四海の  
 浪風穩に金の音をこむ峰の松風万歳くゝと祝と  
 て天下豊に治まれは土の郭の我等まで豊かに榮  
 ひし熱田の宮立たりければ誠に目出度候へける  
 何れも「御万歳といふや」で初まり「誠に目出度候  
 へける」で終る右終て大夫が才造に珍しきはなし  
 なきやともとめる才造得意になつて話し出す話の  
 種類は種々あるが概していへば滑稽的でどんな人  
 でも笑ひ出さずには居られない一方には辨の達者

なのにもよるであらうこの話が一つ終れば一番おはるのである更に或種類のまひ歌をうたひて二番めをはじめめる舞ひ終て話をはじめるといふ順である而して其家々の家例で十二番みなやらせる家もあるまた七番五番三番よりすくないのは無いすべておはれば酒宴となり万歳の大夫才造は次の間で酒肴の饗應をうけ金子及白米をもろうて歸り他家へまはるのである

我が地方の秘歌

相模高座 平岩繁子

おねんじよおさまよおよねで十よ  
 おねんじよおさまよおよねで二十よ  
 おねんじよおさまよおよねで三十よ  
 おねんじよおさまよおよねで四十よ  
 おねんじよおさまよおよねで五十よ

おねんじよおさまよおよねで六十よ  
 おねんじよおさまよおよねで七十よ  
 おねんじよおさまよおよねで八十よ  
 おねんじよおさまよおよねで九十よ  
 おねんじよおさまよおよねで九十九よ

右の如きこんなつまらない歌で有り升か秋の地方(高座郡南部ノ田舎)では非常に流行して子供の遊んでおる所ではきかない事ばかりません學校などの運動場でも雨天等の時教室の中で(休の時)もおねんじよお様よおよねで云々のこへなきかないことさばありませんそれを行ふ彼等は實に面白くお互に力を入れて汗を流してなるもあります三四才の小さい子供はおねんじよおさまをきく泣く手も止むと申し升

質問題

岐阜縣 田口由之助

女子の總べて男子に比し思考力に乏しき所以如何

果して是が事實でしようか、若し實事ならば、其原因は何如  
 でしよう愛讀諸姉の御答を望む (擔任記者)



一月の天地

川口孫治郎

豊築登る旭の光。はのくと東の空の白く、紫  
だちたる山際にいと麗かにさし昇りて樂しき新玉  
の年は來にけり。謹みて我大君の萬歳を祝し奉り  
更に互に健全を賀して、茲に何となく樂しく勇ま  
しき心地ぞする。  
金色燦爛たる服装と星の如き勳章とに飾られて、

將軍の駿馬に跨りて駈けるあり、鏘々たるは其  
佩劍の音なり、鬩々たるは駈け行く蹄の響なり。  
母に着せられし正月着寬に腕白小坊の竹馬に鞭つ  
て揚々として走せ來るあり、其戴ける帽、其穿て  
る靴、正にこれ之が爲に前一夜殆んど眼られざり  
しものなり。シャン／＼たる初荷の馬の鈴の響は  
如何、ブン／＼たる風鈴の唼りは如何、更に一步を  
すゝめてカチ／＼たる羽子のはづみは如何。

堅木炭珍珍と熾る爐邊 窓外日は暮れて風寒さ  
に煖爐の／＼たる邊に、一家團樂し若くは親  
友相會して、過去を語り將來をはかる、風は止み  
て窓にささやくは雲なり、談益進む、雲に代り  
て投礫の如く聞ゆるは霞なり、それさへ音無くな  
りて夜はいたく静まりぬ、天候は何かを示せるな  
り

千里一望の銀世界。暖めて窓を排すれば眩さまで、雪の降り積りて、庭も薨も、枯木も松も蟻の小塚も富士山も、賤が伏屋も百敷の大宮も、見渡す限り白皚々。梅の花形點々たるは子犬の躍り出でたる標なり、楓の葉形散り布くは雀の地團駄踏みし跡と知れ。

書尙は咫尺を辨じ難く降り去り來るさまを見よ、舞ふあり、飛ぶあり、踊るあり。打ちつうたれつめも鼻も肩も背中も眞白となりて、茲を前途と雪投げ競ふ兒等もあり。押しつ押されつ、轉しつ轉けつ、終に轉げぬ雪圍を、頓て其儘胴となし、頭も載せて雪達磨炭圍の眼鼻の面白さ、勝鬨わけて喜び勇む兒等もあり。

憐むべきは。雪中に、残れる旃檀樹の實を啄まむとする椋鳥なり、南天の實や柁の種を籬にあざり

に來る鶉なり。終日雪踏み越えて門に來る樽拾ふ童なり寒けき月の獨深と懸れるに立出でみれば、乾坤凡て水晶宮。池の何處に鴉や眠るらむ、浮ぶ氷山の片蔭に白熊や蹲まるべく、遙かの沖に外套眼深く當番の水兵はうつ浪凍る甲板に立つならむ。月影ふみて歸る大路はいたく凍りつめ、歩む足駄の音カラ／＼と牙に渡る。

翌くれば、井桁に釣瓶、敷石捨石など氷の爲に合從連衡し、小溝は全く張りつめられて氷の厚さ三寸、沼に霜柱の高さ一尺有余、氷柱は軒端に長さ二尺許、瀧の傍などには長さ五六尺に及ぶ。

池に湖に鏡の如く張り渡したる面に、勇ましく氷之を試むるものあり。

氷雪の豪氣と草木の勇氣 手に取りたる氷は唯一個の結晶体なり、終夜一條の罅隙に張りつめては



如何なる巨巖も頓ては裂けて碎くるなり。顯微鏡にて見たる雪は美しき一片の小六出花なり、雪崩となりては萬丈の高嶺より礫も巖も林も人家をも諸共に捲き込みて千仞の谿底に滑り落つるなり。此美しき此壯嚴なる此凜烈なる雪と氷との其隙に翻壽草はやさしく黄金色して笑ふなり、柀は角立ちて靜に香るなり、歎冬の臺は黙して頭を擡げたり、芹も薺も勇むなり、雪と花との戰は將に之れより大に始まらんとするなり。

春たてば花みや見らん白雪の

かゝれる枝にうくひすのなく

かるたの秘訣

鶯

水

まちにまぢ兼た新年が參りまして、先づ、

御目出たうムります、新年と申すものは、ほんとに、氣持の善いものでありまして、何となく、氣が、ゆつくりとして來まして、見るもの、聞くもの、御目出たい事ばかりで、憎いものもなければ腹のたつこともありませんで、誰も新年の時の様な心を年中もちて、居たいものであります、何故に皆さんは、新年がうれしいのでありますか、學校が、御休みになるからでありますか、御雑煮餅が、たべられるからでありますか、また、羽子づかされるからでありますか、其は人様によりまして、色々様々な譯があるでありませんか、私も大の正月が好きであります、私の好きな譯と申しますのは、他ではありません、即ち、歌留多遊びかされるからであります、其れで、實は正月は來なくつても、歌留多遊びさへ來ればそれで

よろしいのでありますが、是れは私一人ではあり  
 ますまい、皆さんの内にも、随分、私の様な、歌  
 留多の御好きな方が、あるだろうと思ひます、  
 或人は、歌留多は、衛生に害があるとか、何と  
 か申しますが、其は歌留多も取り様によります、  
 血氣盛な若武者連が、両手の掌で、疊の塵をたゝ  
 き飛ばして、あたから札を引き合つたり、もみ合つた  
 り、猶ひどいのは、人の手から血を流したりしま  
 して、夜の十二時頃に食事をし、おまけに其晩は  
 徹夜といふ様な事をすれば、其は最も害がありま  
 しょうけれども、元より皆さんの遊ばす歌留多  
 は、左様な下品な遊びではありません、初めに列  
 べた札は、終りまで、決して其位置を亂さないで  
 他處のを取るにも、内のを取るにも、必ず二本指  
 の先で致しますから、他の札に觸る様な、汚い取

り方はしないのであります、勿論、札の引き合ひ  
 なんぞ、思ひもよらない事であります、  
 御夜食などは、なるべく致さない様にしたのも  
 のであります、あまり愛嬌がないと思へば、煎餅  
 か蜜柑ですまして、遅くも十二時には、やめ  
 る様に致したいものであります。  
 人は何事に限らず、自分が、一生懸命になりま  
 した時が、一番其人の本性が知れるものでありま  
 すから、歌留多なども、なるべく、あざやかに、  
 奇麗に取る稽古を致したいものであります、汚な  
 い手つきで勝をしめるよりは、あざやかな、奇麗  
 な手ふりで、敗を取る方が、其人の本性の美が知  
 れまして、誠にゆかしいものであります、  
 皆さんも御上手の事と思ひますが、さて、ど  
 うしたらば、歌留多が上手になるでありませんよう

か、どうしたらば、人より取られない様になるで  
ありましようか、其につきましては、色々の御流  
義、があるでありましようが、茲に、私が人より  
習つたのを、少しばかり、御話致して見ようと思  
ひます、

歌留多を取りますには、申すまでもなく、先づ  
第一に自分の内を守りて、猶其餘力があれば、他  
處のを取りに出かけるといふ事が、必用でありま  
して、内をも守らないで、やたらに、出かけて参  
りますと、其御留守を人から襲はれまして、大敗  
北を來します、

内を守ると申します事は、とりもなをさず、何  
々の札が内に有たといふ事を、よく記憶致して置  
く事でありますが、是れは、中々、困難な事で、  
つまり、歌留多の上手下手は、此處から別れるの

であります、其故に、申すまでもなく、容易く記  
憶する様な法を、あみ出す事が出来れば、其人は、  
所謂、上手な歌留多取りであります、

其記憶法につきまして、百枚の札を、唯、無茶  
苦茶に、記憶しようとはしますのは、無益な腦力を  
費しまして、とても、出来るものではありませぬ。  
から、何か少しはかり、寄り處をこしらへまして  
出来るだけ、秩序的に、是を腦中に收めましたら  
ば、前に比べて、容易に記憶が出来るに相違はあ  
りますまい、是處が即ち、歌留多の秘訣とでも申  
しますのであります、

其に就て、色々な方法がありましようが、或人  
は、下の句の頭文字の同じものを、一處に列べて  
置くと申しますが、其は極めて上手な人のする仕  
事であります、反て、人から、取られ易いに相

違ありませぬ、また、自分が取るのにも、先づ、読み手が、上の句を読み終りて、下の句の頭文字まで來なければ、其處に、目が向かない譯でありませぬ、是法はとるに足りませぬ、其處で私の申しますのは、皆さん御承知でもありません、先づ、上の句の頭文字の同じなので、下の句を列へで置くのであります、其れでありますから、例へば

知るも知らぬも

やくやもしほの

紅葉のにしき

こひしかるべき

人しれずこそ

おきまごぼせる

といふ風にして置きますと、一寸知らないものが見ますと、秩序も何もない様であります、實際見れば、大に秩序があるので、此六ツの歌の上

の句の頭文字は、皆この字であります、

斯ういふ風に、他の歌も、皆、上の句の頭文字で群をつくりまして、其群の内の歌が來ました時には、何時も、第何段目の、左とか、右とか、中とか其場處を一定してかくのであります、即ち各の札の位置を確定するのであります、かくして置きますと、読み手が、上の句の一字を読みや否や早や、自分の目と手はいつしか、其處の處に、假令、其札が、自分の處に、有ても無くても、知らず、注意する様になりますから、決して、人より取られるなんていふ様な事はありません、即ち、眼のくぼり處が、次漸狭くなりますから、腦力を費す事も、餘程少くて、上手に樂に取れます。さて各群の列べ方の事ではありますが、是は自分の思ひ／＼に、どうでも便利にして、覺え善い様

に勝手にきめて差支はありません、いろは順でも  
 〇〇〇〇〇〇〇〇順でも、または、何か上の句の頭文字  
 のみにて、おもしろい歌でもあみ出して、其順に  
 してもよろしうありますが、何れにしても、大抵、  
 三段か、四段位にして置くが、最も便利だろうと  
 思はれます、そうして一番下の段、即ち自分に最  
 も近い段の處に、一番多けいに列べておくがよか  
 ろうと思はれます、なぜと申しますと、先きに出  
 してあるのが、どうしても人から多く取られます  
 からでふります

こ、わ、な、あ、  
 こ、お、た、

十七枚  
 八枚  
 七枚  
 各六枚

今、上の句の頭文字にて、百枚の札を、多いの

からかいて見ますと

み、か、は、か、よ、  
 や、は、か、よ、  
 ひ、き、ち、い、  
 ひ、き、ち、い、  
 う、う、つ、し、も、  
 ふ、め、む、さ、ほ、せ、す、

七十八  
 五枚  
 各四枚  
 各三枚  
 各二枚  
 各一枚  
 合計 百枚

其れで、列べる時に、下の句の札を見れば、直に  
 其歌の、上の句の頭文字を思ひ出す様に、熟練な  
 ければなりません

今、一ツ必用な事は、上の句の一句と、下の句  
 の頭の二三字とを、続け様に、口ぐせにして置く  
 事でありませぬ、例へば、よもすからねや、さむし  
 さにいつこ、とかいふ風であります

右の秘訣を熟練致しますれば、いくら亂置軍の強  
 者が何人來ても平氣で決して敗ける事はありませ  
 ん、私などは、極めて下手の方であります、昔  
 亂軍にして取りませぬ時分には、百枚の歌留多を一

人でならべて取りますに、どうしても七分以上かゝり居りましたのが、右の秘訣で取りますと、三分から長くて三分二十秒ならば、少しも振動せず、百枚を一人で取る事が出来すすから、まして皆さんの様な、御上手な方々が、右の秘訣を、御熟練なさりましたら、二分以内で百枚を取る事が出来るでありません。

子の日に都へ行かん友もかな

芭蕉

### 正月の飾り物と飲食物

せく生

我が國は年の始毎に、先づ門並に雙の青松雙の青竹を相對して立て之に注連繩をひきかけ、屋内の神棚には其注連の中間に干鯛雙尾、海老一箇及び

橙、白柿、昆布、裏白、讓葉等の品々を懸け、鏡餅を供へて三ヶ日は家人打ちよりて齒固、屠蘇、雑煮等を飲食し、壽を祝し邪を拂ひ家運の長久を祈る事、古よりの習俗にして、家々大抵同様なれども、地方により又家々特有の家例或は貧富貴賤等によりて多少の相違あるが如し、此れ等の由来を知る事は甚だ面白く頗る有益なれども、今一々明かに知る由なし、只茲には古來よりの説に聊愚案を加へ、學問的にはなく勉めて俗に略記せん。

#### (甲) 裝飾物

(一) 松と竹 此の二ツは飾竹、門松、立松、飾松などいひて家の所々に飾らる。支那にては松は百木の長として門閭を守るなど稱せられ、竹の節操と共に其の常盤なるを喜ばれ、我が國も松を千年

の契ちぎり、竹たけを萬年まんねんの契ちぎりなどいひて共に吉事きちじに欠くべからざる一品ひとひなとして、斯かくは正月せうがつにも用もちひ來りしならむ。

(二)炭すみ 此これを飾松かざりまつの本もとに用もちふるは、炭すみが邪惡じやくあくを去さる(有機物を吸収し、空氣水)爲なめといひ、又土中またどちゆうに埋うもれて年久としひさしく朽くちざるより、長久ちゆうきゆうの意もちに用もちふるなりともいへど、堅炭かたすみなどいふ所ところより家運かえんの堅かたき様ようにといふ義ぎといふ當あたれるが如ごとし。

(三)飾繩かざりなはと注連繩しめなは 飾繩かざりなはは 連繩しめなはを著しるく大きくせるものにて、同おなじ起おこりのものなり。之これは神代天じんたいあまの窟戸いわとの故事こじに出いで、總すべて神聖しんせいなるものには之これを張はりりて妄みだりに近ちかく能あたはざる様ようにし不淨ふじようを避よぐる意味いの物ものなり。注連繩しめなははもと「しりくめ繩なは」といひ古事記こじにも編出ひりくめ之繩なはとあり、「しり」は「意い」の意い、「くめ」は「籠かご」の意いだが、久ひさしき間あひだに轉訛てんかして今日こんにちの如ごとくいふに

至いたれり。

(四)鯛たひ 之これは正月せうがつに言いふ目出度めでたの語音ごおんに似にたるより用もちふる。

(五)鹽鮭しほまがと鹽大口魚しほたらち 此これ等らを用もちふる處ところは鯛たひを用もちひんとして得える能あたはざる山間さんかんか若ごとくは鯛たひはなくて此これ等らは反かえつて多おほき地方ちほうのみなりしに、後のち來きは一般いっぱんに此これ等らが得え易やすき爲なめ今日こんにちの如ごとくに至いたりしから。

(六)海老えび 蝦えをか書かく故ゆゑに字義じぎも其その物ものも共ともに長老ちやうろうの意いあり。即すなはち腰こしの曲まがるまで海うみにて老おいたる物ものといふ意いなり。

(七)鬘斗のし 之これは天照太神伊勢あまてらひくしの國くに五十鈴川いすずがは上にて神代じんたいの人形にんぎやうを學まなばせ給たまひて作り始め給たまひたりと言い傳つたふる程ほどなれば、其その語ことばも其形そのかたちも年老としおいて尙腰なほこしを「のし」て曲まがらず壯年者そうねんしやの如ごとくといふ意いにて海老えびとは反對はんたいの如ごとくなれとも、海老えびは實じつに長壽ちやうじゆうの極きまに

して鬩斗は其れに至る間の健全の意ならむ。

(八) 昆布 「こぶ」ともいひて「よろこぶ」といふ國語に似通ふ縁起のよき物として用ひらる。

(九) 橙 之は霜を帯びて黄に熟し、冬を過ぎ春に至て色ますます濃く、夏を経て又色を變じて青く、久しきに耐えて新舊辨ずべからず、國音だいになるより代々ともかさ噉はずと雖も嘉祝の果とす。

(十) 椽 之は新葉整ひて後に舊葉落つるが故に此の名あり。又親子草ともいひ、親は必ず子を得て後安心して死すといふ意に用ふ。

(十一) 裏白 即齒朶は蕨に似て異なり。四時死れす。よりに松竹の如く嘉祝に用ふ。一説に「しだ」の齒は「よはひ」、朶は「えだ」にて齡は此の枝の如く伸長する義なりといへど如何。

(十二) 野老 山薯に似たり。蝦を海老と書きて字義より祝の物とする類なり。

(十三) 搗栗 搗の音勝に通ず勝負に勝つことを悦びて用ふるなり。

(十四) 白柿 新年早々物を抓と取るといふ意かみならず、其の花の黄金色なる、其の容態の奥ゆ

かしく、其の名までも福々しきが爲に、特に元日に飾られて又元日草ともいはる。

(十五) 鏡餅 餅は元來神靈に供する物(古昔主として餅を食したる時)にして、天照太神天の岩戸より出御せしまし、時の事を寫して圓く裂り鏡餅といひしならんか。其の重ぬるは單獨を忌みて隅敷を喜ぶよりせりと。

(乙) 飲食物



(一) 屠蘇 又椒酒ともいひ製方一ならず。大方山椒、防风、肉桂、桔梗、白朮等を調合して之を紅絹を鱗形に縫ひたる袋に入れ、清酒若しくは味淋に浸したるものにして正月特に元旦に當りて幼者より順次年長者の飲むものなり屠は鬼氣を屠絶し、蘇は人魂を蘇醒す。之を飲めば年中の邪氣を除くべしと、江次第等を見るに、元日より三ヶ日平旦に天皇(嵯峨)清況殿の東廂に出御ありて御齒固の御膳を供じ次に御藥を入れたる屠蘇を供する事、弘仁年中に始まり。公事根源にも此の事を記して、「一人これを飲みぬれば一家病なし、一家これをのみぬれば一里病なし、一里のみぬれば一國病なし」といふめでたき効能待れば年の始に之を奉る「なごあり」。

(二) 雑煮 餅に大根、芋、菘、昆布、海鼠等を

混して羹とす。種々雑へて煮る故に雑煮と稱し略して「かん」羹を祝ふといふ。之は上古生活の習慣の永く後世に残りたるものなるべしといふ。

(三) 齒固 上古には猪鹿の肉を用ひしが今は餅押鮎、芋等を用ふるに至れり。さるにても此れ等正月の儀式には歴史的に上古生活の狀態の残りたるものあるを知るべし。齒固とは「よはひ」を固むる義なり「イ」押鮎は鹽鮎にして鮎を「年魚」と書くより年を祝ふ魚とす(ロ)芋頭は民間に「いものかみ」といひて掃除頭立菘頭の「かみ」に因みたり。子多さより多子の義にとれりといふ。

(四) 豆「ごまめ」數の子」之等は組重のものにして、(イ)豆は無病息災にて健全なる様といふ意(ロ)「ごまめ」は五万米鯁の事にて、矢張健全の義に取る。農家にては又田作と稱し武家にては小

殿原など祝語を用ふ。(ハ)数の子は練の子なり練の本名は「かど」にて「かどの子」は「かずの子」と詛りたり。多子の義を取るなり。

以上列記したるが如く説明甚だ不十分なれども左の如き事までは約言するを得べし。(イ)古人の一般の敬神思想即一種の宗教心に基きたるものあり事。(ロ)始を重んじ先祖を忘れぬ爲に古俗を守る事。(ハ)縁起即ち事物の兆を重んずる習俗より何事も最初吉ならざれば終まで善き事を得ずといふ一種の信仰を以て正月を考へたる事。(ニ)一般に聯想上より正月に使用すべき言語事物は吉事善事に縁あるものをのみ用ひたる事。(ホ)其等の事物は自然に其の時節に合ひたる品の中より採用したる事なり。

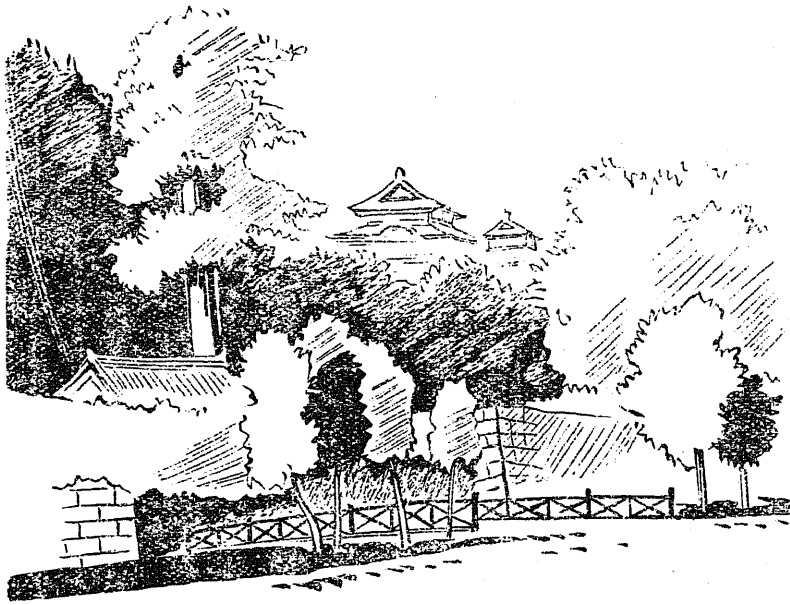
七草やあまにうかる、明烏 其 角

## 和歌浦案内

## 和歌子

紀州の和歌浦と申せば、皆さん御承知でもございませうが、紀伊國の一名所で昔聖武天皇が行幸あらせられた時に、明光浦といふ名を御つけあそばされた處でございませう、景色のよいことは我國の三景に次ぐと申しますが果してそうでございませうか、どうですか、私はまだ三景を見たとがございませうから、うけあふことはできません。しかし何にしても勝地で名高い處でございませうから、今日はひとつそこに御案内をいたしませう。紀州に行きますには、東からでも西からでも大坂を経るのが順路です。そこで大坂市の難波ステーションから、南海鐵道の涼車に乗つて大坂灣に沿うて走り、和泉を通りて、紀伊に入りますと、開

もなく和歌山市の北口ス  
 テーションといふのに着  
 きます。こゝから本町と  
 いふ賑やかな町を通過、  
 和歌山市の中央まで参り  
 ますと、虎伏山といふ小  
 山の上に。和歌山城が聳  
 えて居ります。一寸立ち  
 寄つて城に上りますと、  
 随分高いものですから、  
 方々がよく見えます。和  
 歌の浦も見えます。即ち  
 和歌山縣、和歌山市にあ  
 る和歌山城からはるかに  
 和歌浦が見えるのでござ



八十四

います。さてこういふ高  
 いところから見下した和  
 歌浦は、又一段の景色で  
 たれしも、あゝ、あすこに  
 往たらどんなにいゝでせ  
 う、と思はぬ者はありま  
 すまい。それではいよ  
 く此城を下りて出かけ  
 るといたしませう。

和歌山市を南にはなれて  
 和歌街道を七八丁も行き  
 ますと、高松といふ處が  
 ございます。其名の通り  
 高い松が道の兩側に並で  
 居りまして、松風が颯々

と耳を洗ひます。夏の夕方、此松の下を月と一緒に歩くなどは、誠によい心持がいたします。此並木を通りますと左側に根上り松と申して、根の高く現はれたのがございます。又右側には高松の茶店と申て昔から名高い茶店もございます。

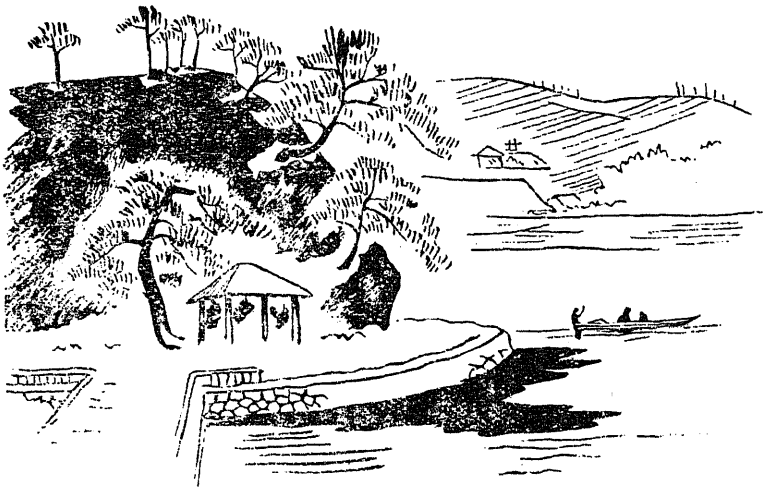
此茶店で少時休んで、又もや出かけますと、愛宕山、彌勒寺山、秋葉山などが左側にございます。一々登て見ると和歌山市や、和歌浦が眼の下に見えて、眺望のよい處でございます。秋葉山には、楓樹が澤山ありますから、秋は是非御登りになることを、御すゝめ申します。それから龜遊岩と申て、龜が遊て居ると見れば見ゆるやうな岩、五百羅漢寺などを左に見て行きますと、いよゝ和歌浦に参ります、こゝは、和歌山市から一里ばかりでございます。

さて、いよゝ和歌浦に着きましたから、東の方からそろゝ見物いたしませう。まつ東の方に蘆邊浦といふ入江がございます。こゝは山邊赤人が和歌の浦にしはみちくれはかたをなみわしべをさしてたつなきわたる

と詠じた處ですが、今はたつた一羽の鶴も居ません。こゝに鶴が居たらどんなにかろう、と行く度に思ひます。只今は海苔と牡蠣を多く産します。この入江の中に、一の小な島があつて、そこに妹背山といふ山がございます。三斷橋といふ石橋を渡つて此島に行き山のすそを半分ほどまはりますと、観海樓といふのがございます。俗に拜殿となへて居ります。

拜殿は水に臨んで建てた一寸神樂堂のやうな建物で、だれでも自由に入る事ができます。向を

見れば、名草山の半腹に  
ある紀三井寺は、入江を  
へだて、丁度向合になつ  
て居りやすし、右方を見  
ると和歌浦がずつと見え  
ますし、山と海の景色は  
實に何とも言はれません  
私わたくしはあゝ夏の夜母や友  
だちと一緒に、此拜段で  
月を見ましたが、名草山  
から大きな月のさし出る  
わんぱい 浦の波が静に  
拜殿のすぐ下の岩にくだ  
くる音、實に心の底まで  
澄み渡るやうで、立ち去



八十六  
ることが出来ませんでし  
た拜殿にも別をつけて、  
又三斷橋を渡りますと橋  
の前にあしべやといふ家  
がありまして、この名  
物は牡蠣飯でございます  
こゝから元來た道を後に  
して、あしべやの後を廻  
て臈山に登りませう。こ  
ゝは聖武天皇稱徳天皇の  
行幸の事蹟で、和歌浦の  
全景が、一目に見へます  
此山の麓に玉津島神社が  
あります、昔から名高い  
神社でござります、こ

に御まゐりしてから、和歌浦の濱に行かうとする道に、不老橋といふ石橋が有ります。

此邊には、獨蟹と申て一方の爪が至て大きく、一方の爪は至て小さい蟹がガサ／＼と這つて居ります。子供なんかは、よろこんでつかまへようといたしませんが此蟹なか／＼足が早く、こそ／＼と穴の中に逃げこみます。

不老橋といふ名に若がへつて、勢よく進みますといよいよ和歌浦の濱邊に出ます。白沙青松と申ませうか心もちのよい浦風は吹きますし、向を見渡すと、白帆も見えます。青々とした水のはては、一直線になつて天と接して居ります。南の方には地の島、沖の島、雙子島などいふ小島も見えます。ほんとうに心がひろ／＼といたします。

濱邊で一休して方々を見晴らし、勇氣を出して

既足になり具を拾ひながら、たまにはよせて来る浪で裾をぬらして逃げながら濱邊をつたひますと片男波にまゐります。これは和歌浦の南の方の海濱のことで、いろいろの色をした晒石がちらばつて居りますから、海を見はらしながら、一休する価値はたしかにございます。昔はよせてかへらぬかたをなみとか、又は浪に大小がないとか申したそうですが、往つて見ますとやはり普通のやうに、大きい浪や小さい浪がよせてはかへり、かへりてはよせて居ります。

浪打際はこれによして、方角をかへて陸の方にと入りますと、和歌浦の西方の山の上に東照宮がございます。東照大権現、日吉大権現、摩陀羅神の三座を祀り紀伊藩祖頼宣郷の創められた社でございます。毎年和歌祭と申て賑かな祭典がござい

ます、又此山の麓には南龍社がありまして南龍院殿、即ち賴宣卿を祀りてあります。

和歌浦の名所はざつと之位でございます。御遊覧がすみましたらば、和歌浦町にでも、又はもつて和歌山市にでも、御一泊おやすみなすつたがよろしいでせう。

いかがでした。三景に次ぎますかどうかどうでございますか、御案内のしかたが下手でしたから、折角の和歌浦の價値を落したかも知れません。どうぞ、もつとく景色のよい處と御想像を願ひます。

Es ist nicht alles Gold, was da glänzt.

輝くものは總て黄金に

あらす

●學事集會

●女子高等師範學校 ▲附屬高等女學校に於ては先月六日第二回生徒演習會を催うし、校長主事職員等臨席生徒の演説、音樂、朗讀等あり頗る盛會なりし由 ▲同本校生徒は同月十四日如蘭會音樂部を開き、ピアノ獨奏、唱歌合唱、職員唱歌等あり音樂學校の島崎赤太郎氏のオルガン獨奏北村季靖氏の勸進帳等もありて之れ亦中々の盛會なりと云ふ ▲同終業式は廿四日を以て舉行したりしが同日保姆練習科卒業式舉行 學校長より今回卒業



せる十二名の生徒に向つて夫れく卒業證書を授  
 與せられ懇篤なる訓辭ありきといふ▲来る四月入  
 學を許可すべき生徒の試験は本月十三日より各地  
 方廳及本校に於て舉行すべしと。

●東京府第三高等女學校 東京府參事會に於ては  
 愈本年四月より、授業を開始することに決した  
 りしが、校舎の新築は來年までかゝるが故に、當  
 分は假校舎に於て、授業すべき考へなりといふ。

●日本女學校 西澤之助氏校長、三輪田眞佐子  
 刀自の學監たる同校は、生徒數殆ど六百名に達し  
 頗る盛況なるが、校舎の建築方危險の恐ありし由  
 にて、文部省より注意せられ、客年中手入申なり  
 しが、本年はもはや完成せしならん。

●共立女子職業學校 同校に於ては、毎年畏き  
 邊よりの仰せに由り 生徒の製作品を觀覽に供ふ

べき光榮を被むり來りしが 客年十一月二十八日  
 にも、同様の御沙汰を被むり一同天恩の深さに感  
 佩して早速御命を拜し奉れりといふ。

●東京府第一高等女學校談話會 同校は去る廿  
 四日を以て終業式を舉行せしが、全日引續き午  
 前九時より第二學期談話會を催ふせしが、一年よ  
 り五年に至るまで或は讀本講讀、談話、朗讀、會  
 話、即席揮毫、英文暗誦、英語對話唱歌等あり、  
 頗る盛會にて正午散會せりと云ふ。

●東京音樂學校 ▲同校秋季演奏會は先月七日  
 八日を以て全校奏樂堂に於て開會、兩日とも聽衆  
 にて立錫の地なきまでの盛況なりしが、全校生徒  
 の技倆は月に日に進歩發達の跡著るしきまでに巧  
 妙に至りつゝありと云ふ▲同聲會并にベートフエ  
 ン會は同月廿一日午後五時より一ツ橋通り分教場

八十九



に於て催うしたりしが、これ亦中々の盛會なりきとのこと。

●神戸保育會 先月七日同市頌榮幼稚園に於て

開會、出席者百餘名、ミス、ヒュースの適切なる

演舌あり午後四時閉會したりし由。

●女子學術講習會 東京府教育會にては、本府

小學校教員補充の一方として其筋よりも補助を

得て教員講習所を設け、目下五十餘名の男生、三

百餘名の女生徒を教養しつゝあるが、更に又女教

員たるに必須の學力を補修し、兼て一般女子の爲

めに新智識を啓沃せしむる目的にて、本年二月よ

り女子學術講習會なるものを開設し、理科(動物、

生理)家事の二科目に就き、日曜毎に午前九時よ

り三時間づゝ授業し、三ヶ月間にて結了する豫定

なりと云ふ。尙結了までの講習料は金壹圓五拾錢

にして之を二回に分納するも妨げなしと、又前記  
傳習所のうち、本科准教員傳習所は今回學級數を  
増加せしにより臨時生徒を募集申なり、同所學科  
目は修身、教育、國語、漢文、歴史、地理、算術、  
習字、体操、裁縫の諸科にして修業年限は一ヶ年  
授業料は七拾五錢なりとのことなり。

●筆の筆

●香川縣師範學校附屬小學校女生徒の改良服  
同校にては這般女生徒の服裝を改良して筒袖とな  
し、髪はなるべく垂髪とせしめしに、此の頃は全  
校兒童悉く筒袖となり頗る輕快に活潑なる運動を  
なしたつゝありとのことなるが、此の改良服も未だ  
完全なるものにはあらず將來は一層改良を要すべ  
き點もあらんが、目下の處習慣等もあれば之等を

大に斟酌して、單に袖の部分の改良に止めたるものにして家庭服學校服といふが如きものを製せしめざる様注意せしものなりと同校の主事は語られたる由。

●風俗改良會の改良事項 風俗改良會が、先

月十八日の會合に於いて、決定したる改良事項は、目今の時弊にあたれるもの多く、即ち、左の如くなりといふ。

- ▲訪問は、午前は九時より十一時、午後は二時より四時(日の永き季節は五時)に至る迄を通例とす
- ▲訪問の際の談話は、冗長に渉らず。時間短、短少なるべし。
- ▲訪問には名刺を出し、而會せざる時も之を遺し置べし。
- ▲訪問者には、茶菓を出さざるを通例とす。
- ▲業務上の訪問には、餘事を語る可からず。
- ▲訪問者の名刺は、白色の紙質を用ひ、裝飾を附す可からず。
- ▲訪事を受けたるときは、勉めて、速かに面會をなし、徒らに、その人を待たしむることなかるべし。
- ▲人と對話するに、野卑の言葉を用ひざる様注意すべし。就

中、猥褻の事は堅く之を慎むべし。

- ▲文章演說對話に於いて、人の氏名を呼捨にせざるを善とす。
- ▲社會共存の義に由り、他人の妨害をなさざることを勵むべし。之を例せば、▲道路の通行には左側を通り、人車道路の區別ある場所に在つては、必ず、人道を取るべし。▲途上に於いて、車馬又は歩行者を超越さんとする時は、必ず、其の右方に出づべし。又、後方より警聲を掛けられ、之を避けんとする時は、必ず、左方に於いてすべし。▲途上に佇立し、立談すべからず。▲途上に出來事ある時、其の場所に群集し、通行の妨碍をなさざる様心掛くべし。▲總て人に接し、又は月外に出づる時は、見古しき服裝をなさざる様注意すべし。▲途上又は船車中に在りては、容姿を端正にすべし。船車中に在りて、無作法なる態度をなし、座席を廣く横領し、或は、酒宴に似寄りたる事をなし、總て他人の迷惑を省みず、我儘の行爲あるべからず。
- ▲渡船場乗車場にて、先を争ひ、混雜せざる様注意すべし。
- ▲劇場寄席等にては、極めて靜肅にすべし。多人數集會の席にて、濫りに私語をなし、新聞の音讀等をなす可からず。
- ▲老幼婦女に對しては、及ぶだけ力を添へ、之を扶助することを忘るべからず。
- ▲公衆の眼に觸るゝ場所に設置する時計は、努めて、其の時刻を正確にする様心掛くべし。
- ▲回答を要する文書に對しては、努めて、速に返事すべし。
- ▲案内狀は、成るべく、一時間以前に送るを善しとす。

▲酒杯の飲酬を廢止すべし。

▲饗應の飲食物は、其の席に於いて、飲食する者に止め、總て、客人の持還り、又は、其の家に送り届くる者なきを善しとす。

▲虚飾無用の物品贈與を廢すべし。

▲會葬の際は、儼肅なるを要す。葬儀の節、生花、造花、放鳥等の贈物を爲さざるを善しとす。會葬者に飲食物を差出し、又は、其の馭者、馬丁、車夫等に、飲食物金錢等を交附せざるを善しとす。

▲旅店、其の他の茶代は、一切廢止せしむる事を勉むべし。

●婚禮千代かがみ 著者は石井泰次郎氏なり、

氏が禮法料理故事等に精通せるは何人も熟知する處、前に紐結包物標本を著はして大に好評を博せられたり本著は主として實用禮法を主として編定せられしもの、由新年早々發刊すべしとのことなり。

●赤十字社々員 昨年九月の調査の同社員數は

名 譽 二十九人  
特 別 三千四百五十八人

正 七十七萬三千八百四十三人

贊 助 一萬四千八百八人

佩有功章 二百七十六人

年據金義務終了者 正 五萬千八百七十六人  
贊 千七百五十五人

にして、總計七十七萬一千四百四十三人なりと。

●マツケルマン女史の演説 米國婦人同女史は

先般來大坂土佐堀青年會館に於て、數回の講演を續けられし由なるが、女史が、「大日本帝國の偉人と其偉業」と題して述べられたる要旨は、先づ偉人として、殊に女性の神功皇后を始め奉り、今上陛下の盛業を稱揚し、次いで伊藤大隈二侯伯に及び、更に日本人の長所として團結の力に富み忍耐強きを贊し、文明の事業駭々として進歩せることを説き、然るにかゝはらず 常に財政上の困難を來せるは主として、其實力の世界に知られざるに在り實力知れさへすれば我北米合衆國の如き

八十億の資本を餘して其使途に苦める國柄にては、資本家の争ふて資を日本に投ぜん事當然なれば、明後年の博覽會を機會に日本を世界に廣告するの手段を取ることを必要ならん、就ては豫め世界の要處々々に人を派して口に筆に日本風土の美、實力の發達國民の長所等を吹聴して、歐米人を日本に誘ふことを必掛くべし、是れ殊に大阪人士の最も注意すべき所ならんと説き、其他合衆國の盛運を今日に見るは女子の智徳發達せしがためにて五十年前には米國中に教育ある女子十餘人に過ぎざりしなれば、日本も今後廿五年を経なば非常なる進歩を見ん云々と結び、拍手大喝采の中に講演を終へしとの事なり。

海外彙報

●米國の子供の身體測定の結果

▲頭の周圍の成長

●共に精神上の働きが成長す▲勞働社會ならざる階級の子供は、勞働社會の子供に比較し其頭の周圍大なり▲男子の頭の周圍は女兒の頭の周圍より大なり、然れども黒人種に就ては女兒の頭の周圍が却て男兒より大なり▲黒人種の女兒は各年齢とも白人種的女兒に比し其頭の周圍大なり▲女兒は男子に比し、或る一定の時期間、其身體大にして且重きことは記應すべき事實なり▲白人種の子供は之れを黒人種の子供に比し單に起立したる時に丈の大なるのみならず、坐したる時に於ても一層大なり然れども黒人種の子供は白人種に比し其重量大なり▲穎敏男兒は穎敏ならざる男兒に比し通常身體大且重なり▲穎敏なる黒人種の子供は穎敏ならざる黒人種の子供に比し大なるも坐位に於ては穎敏ならざる男兒の方却て大なり▲女兒の大きさ及重さの大ききことは勞働社會に在ては勞働せざる社會に比較し殆んど一ケ年の差あり▲勞働せざる社會の子供は勞働社會の子供に比し通例坐位に於ても大且重なり▲女兒は男兒に比し勤學大なるものなり▲勞働社會ならざる子供は、勞働社會の子供に比し、修學に當り其能力大なり▲雜種の人種に就ては、精神上の働きは良好ならざるものゝ如し▲女兒は男兒に比し、修學に當り能力平均す、故に女兒に就ては、其働きが同一なり▲年齢の長すると共に、多くの學科に付ては不熟心となり

從て急遽療治の質を帯ぶ、但齋取手丁等の器械的の仕事は例外なり  
▲黑人種の子供は白人種の子供に比し、年齡長すると共に學科に熱心さなる

潤滑ならざる子供に付ての結果 ▲養育社會ならざる男兒は勞働社會の男兒に比し、羸弱なるもの多し▲男兒は女兒に比し、言語の不充分なること多し▲男兒は女兒に比し、怠惰にして制御し難きものなり▲頭敏ならざる男兒に制御し難きもの多し▲子供の通常ならざる出来事は、其發育時期に於て最も多し▲通常ならざる現象を有する子供は他のものに比し大々重々其頭の周圍に於て劣れり

●米國前大統領の死と喫煙 當時醫師の診斷せし處によれば大統領危篤の際、其脈膊の極めて微弱なりしは、嘗て氏が非常の喫煙家なりしに因ると云ふ、之れが爲め幾分か其死を早からしめしな

るべしとすれば、喫煙の害亦恐るべきなり。

新刊書紹介

▲國語綴り方

全一冊

堀越伴次郎 共著  
土屋橋四郎

本書は小學校國語科に於ける綴り方に關する理論及實際を指示せ

られたるもの、從來小學校に於て最も其方法の困難を感じたるは作文科、即綴り方にてありしなり。本書は改正小學校令に準據して最も詳密に其方法を記載論定し、且つ尋常一年より高等四年に至るまでの數多の實例(言文一致)を掲げ悉く之に細密なる注意を附加せられたるなど、殊に實地に當る人の便宜とする所なるべく從來本書に類する數多の著書中最著實良好のものたるべし(定價四十錢 發行所 金昌堂)

▲もとのしづく 全三冊 三宅龍子編

我が婦人子ども愛讀譜姉は、客年數號に渡りて下村教授に依りて紹介せられたる奇代の女傑野村望東尼の人となり記憶せられしならん。本書は實に彼の望東尼の詳傳なり。多趣多様なる尼の事蹟は花南女史流麗の筆に依りて高き、安んぞ面白からざるを得んや、製本優美印刷鮮明、年玉の贈品さしても最妙なるべし(定價各六十錢 發行所 金港堂)

新刊雜誌

●點を附したるは婦人雜誌なり

- ▲日本婦人 第二五號 帝國婦人協會
- ▲大八洲雜誌 卷一八五 大八洲館
- ▲東京教育雜誌 第一四四號 同發行所
- ▲令德 第三卷第九 令德會本部
- ▲衛生談話 第一一號 通俗衛生茶話會

▲婦女新聞	每號	全社
▲牟婁新報	每號	全社
▲山梨教育	第八四號	山梨教育會社
▲越佐教育雜誌	第一〇七號	全社
▲岐阜縣教育會雜誌	第八六號	岐阜縣教育會
▲新文	第一卷第八號	言文一致會
▲女子之友	第一〇四、五號	東洋社
▲女鑑	第二四二號	國光社
▲日本婦人新聞	第一二號	全社
▲學生俱樂部	第二卷第三號	育成會
▲家庭	第一二號	全發行所
▲教育時論	第五九九、六〇〇號	開發社
▲教育學術界	第四卷第二號	教育學術研究會
▲北海道教育雜誌	第一〇六號	北海道教育會
▲婦人新報	第五五號	婦人新報社
▲うらにしき	第一一〇號	尙綱社
▲英學新報	第一卷第三號	英學新報社
▲下野教育	第一七八號	下野教育會
▲苦學界	第九號	苦學社

# 會報

第二十三常會 十二月七日午後一時三十分より女子高等師範學校附屬幼稚園に於て開會せり中村主幹の開會の辭次て文學博士松本亦太郎君のニュイングランドの一家庭に就て有益なる演説あり(本號説林欄に掲ぐ)鳩ほつほやよ子供お正月の唱歌遊嬉をなし隨意談話の後保姆合唱の唱歌にて午後五時閉會せり來會者は會員六十名同伴者十數名なりき

## 入會

### 東京ノ部

女子高等師範學校 新免義男  
 神田區駿河臺北甲賀町一〇釘宮剛方 喜地すゐ  
 牛込區横寺町二九 淺田つる  
 本所區江東小學校 山田きみ  
 小石川區指ヶ谷町一一七 有川ひさえ

### 地方ノ部

上野國多野郡小野村大字森新田 關口たけよ  
 長崎縣壹枝郡願伏村二十九番戶 長谷川阿喜

### 轉居

婦人子ども第二卷第一號

小石川區江戸川町一三龜岡方へ  
 横濱市北方町字西ノ谷八二四へ  
 東京市本郷區駒込退分町三〇へ

會費領收 自三十四年十一月二十七日  
 至三十四年十二月十六日

一金壹圓	自三十四年九月	羽田ゆき
一金貳拾錢	自三十四年十二月	師岡のぶ
一金六拾錢	自三十四年七月	境さき
一金五拾錢	自三十四年十一月	岡田千代
一金六拾錢	自三十四年三月	吉住きく江
一金六拾錢	自三十四年三月	吉澤さも
一金三拾錢	自三十四年十月	平塚さだ
一金三拾錢	自三十四年十月	重田ふぢ
一金三拾錢	自三十四年十月	坂本あき
一金三拾錢	自三十四年十月	松岡さち
一金貳圓	自三十五年八月	柳きむ
一金五拾錢	自三十四年十月	吉田しう
一金六拾錢	自三十五年三月	千葉ひで

師岡 ちか 仲  
 福嶋 ちか  
 數藤 きん

一金六拾錢	自三十四年三月	妹尾あき
一金六拾錢	自三十五年三月	安藤たみ
一金六拾錢	自三十五年三月	岩村あつ
一金六拾錢	自三十四年三月	服部たき
一金四拾錢	自三十四年三月	山田きみ
一金壹圓貳拾錢	自三十五年十一月	關口たけよ
一金三拾錢	自三十五年三月	北村いさ
一金壹圓貳拾錢	自三十四年七月	青木せい
一金七拾錢	自三十四年六月	小向きみ
一金六拾錢	自三十四年三月	池邊千東
一金壹圓貳拾錢	自三十四年三月	西村さだ
一金六拾錢	自三十五年三月	沼村あい
一金五拾錢	自三十四年九月	脇屋なほ
一金五拾錢	自三十四年九月	脇屋よし
一金五拾錢	自三十四年七月	馬場さら
一金五拾錢	自三十四年八月	金子忠平





御ことわり

關根教授の「我國玩具遊戲につきての話」は本號に掲載すべき筈の豫告を致して置きましたが、編輯の都合によりて残念ながら、出来ませんでした。次號には必らず掲載致します。

# 堀内新泉子著

## 家庭讀本

全 四 冊  
 挿畫入美本  
 定價一冊拾六錢  
 夏卷  
 春 既  
 秋 刊

目下淫猥な小説の盛に家庭に行はるゝを憂ひて、昨春以來専ら本書の著述に沈吟斷腸せし堀内新泉子の家庭讀本は、今や秋の月を全部完結せんが着想のい高潔多趣味にして、着筆の穩健優雅なるが、讀者の熟知た此に何を云はむ。本書の一世に出づる近來の出版物中實に稀有なる世の激賞を招きたり教育家父子弟婦妻の座右に一日も可憐なる書冊無かる可からず家庭及び學校にも必ずこの冊子を備へざる可からず。殊本書製本も優美にして四季の進物として頗る適當な佳品なり今全部四冊の目次を左に

- |   |                          |   |                        |
|---|--------------------------|---|------------------------|
| 春 | (一)古稀賀 (二)自愛 (三)老船長      | 夏 | (一)庭の若葉 (二)螢狩 (三)游泳の名人 |
| の | (四)花ちる里 (五)ふもちや (六)御國の風俗 | の | (四)雨後の月 (五)蚊やり火 (六)姫百合 |
| 卷 | (七)母の面影 (八)初旅 (九)おぼろ月夜   | 卷 | (七)夕すゞみ (八)夕立 (九)撫子    |
| 秋 | (一)秋の旅 (二)ゆく秋 (三)雁がね     | 冬 | (一)初時雨 (二)木枯 (三)霜夜     |
| の | (四)十三夜 (五)千草百くさ (六)虫のね   | の | (四)冬の月 (五)雪の日 (六)寒紅梅   |
| 卷 | (七)紅葉狩 (八)かくれ家 (九)暮の鐘    | 卷 | (七)うつみ火 (八)水鳥 (九)歳の暮   |

### 發行所

東京神田區小川町九番地  
 (電話本局二四二〇番)

### 開

### 發

### 社



醫學博士 弘田 長氏 閱  
小兒科醫 木村 鉞太郎氏 著

普通育兒法

全一冊 定價七拾五錢

「本書の發行は未だ育兒の經驗なき若き母君には此上なき益友を得られたり」とは弘田博士の證言なりこの書は何人も一讀了解し易きよー平易なる通俗文とし、假名をつけたり記載の事項は我國古來より因襲する育兒の法と西洋の學科により現今實行せらるる最も適當なる方法とを掲載したり殊に小兒病の看護法及食物調理法は現在病者に實行せらるる方法を記したれば坊間のものとは雲泥の差あり

三宅花園女史著

もとのしづく

野村望東  
尼の傳

全二冊 本篇六拾錢 續篇六拾錢

皇后宮陛下東宮妃殿下及閑院宮妃殿下へ獻納になりたる新著なり以て本書の眞價を知り給へ

横井時冬氏著

日本繪畫史

全一冊 定價七十錢

文學士上田敏氏新著

詩聖ダンテ

全一冊 定價八拾錢

女鹿勇氏著

作法心得

全一冊 定價拾五錢

獨逸人エル、レイポルト氏口授

西洋料理法

近刊

此廣告依御注の文は方婦と人供を子見を御附記を乞ふ

●●● 小學校賞與品及び家庭の讀本に最適當の書 ●●●

昔嘯梳太歌

昔嘯かちく山

昔嘯舌切すいぬ

昔嘯花咲ちり

話訓庭家 話訓庭家 話訓庭家 話訓庭家

● 木版密畫極彩色頗美裝製本

定價各金拾貳錢 郵稅各金二錢

發 兌

東京市日本橋區本石町三丁目廿三番地

教育童話

多稼散人撰 遠藤耕溪書  
第五編 加藤清正  
定價金八錢 郵稅金二錢

● 卅五年寅の歲に附録虎のはなし  
近來譯類の著書多しと雖も未だ普通教育  
的に之を記述したるものなれば堂之を愛  
ふること久し即ち普く教育大家に請ふて  
教育童話を出版せんことを期し既ハ第四  
編を發行せり今回又明治卅五年一月の  
刊として寅の歲に因み第五編加藤清正  
録として虎の話を出版す文章極めて平易  
走卒として一讀領解し易からしめ且毎頁  
起し自ら感奮興起の心を發せしむ

- 第一編 大黒天續篇 定價金八錢
- 全 大黒天續篇 定價金八錢
- 第二編 大黒天續篇 定價金八錢
- 第三編 大黒天續篇 定價金八錢
- 第四編 大黒天續篇 定價金八錢

以下逐次刊行

金 昌 堂

(後附の三)

# 初卷より欠本無し

總裁 小松大宮妃殿下  
副總裁 鍋島侯爵夫人



新學年開始  
會員募集

(後附の四)

本會は女子必須の諸學科を掲げたる講義録を發行し家庭を離れ難き女子をして居ながら通信教授を受けしむ仍て一般女子素養の程度に應じ高等簡易兩科を設けると左の如し

- 高等科 (毎月一回二十五日女學講義發行二個年終了東修四拾錢月謝四拾錢紙數菊判三百頁)
- 倫理坪内雄藏○禮法佐方鍾子○教育學安井哲子○兒童學高島平三郎○國文坂正臣○文法今泉定介○作文同○作歌大口鯛二○美辭學島村瀧太郎○漢文土屋弘○日本歷史大森金五郎○日本婦人列傳下田歌子○萬國歷史喜田貞吉○日本地理同○萬國地理同○地文脇水鉄五郎○理化同○算術上野清○博物津田梅子○生理衛生三宅秀○家事衛生同○小兒衛生三島通良○家事經濟後關菊野○家庭教育三輪田眞佐子○割烹石井泰次郎○裁縫渡邊辰五郎○習字坂正臣○繪畫武村千佐子○圖案同○美學島村瀧太郎○音樂東儀季治○插花秀島成鏡○點茶松浦伯爵○園藝池田伴親○法制經濟岡戸謙介○民法城山和夫○社會學岸本能武太○御伽譚○詞藻○質問應答○雜錄○雜報
- 簡易科 (毎月一回五日女學講義發行二個年終了東修貳拾錢月謝貳拾錢紙數同百五十頁)
- 修身談本會編纂○禮法佐方鍾子○國文同○作文今泉定介○漢文土屋弘○日本歷史大森金五郎○日本地理喜田眞吉○算術上野伊志子○博物小此木忠七郎○理化脇水鉄五郎○生理衛生三宅秀○家事大要後關菊野○家庭教育三輪田眞佐子○割烹石井泰次郎○裁縫渡邊辰五郎○習字坂正臣○圖畫武村千佐子○史傳下田歌子○御伽譚○詞藻

今般

事務所手

轉居

東京麴町區下二番町三十七番地

大日本女學會

●會則は請求次第送呈す●東脩月謝を添へ申込あれば假入會を許し直に送本すべし

# 實験教授指針

一冊定價 金十五錢  
郵 稅 金一錢  
紙數凡百五十餘余

每月一回十五日發行 ● 初號に限り三十五年一月七日發行

三十五年一月七日を以て世に出でんとする本誌は學理と實際との調和社會的知識の普及を以て其標榜とし論說、學術、講義、實験指導、教案、學校參觀、研究、彙報、雜誌の八部門を開きて教育界に躍り入らんとするなり初號収むる所は卷首挿圖東京府所轄地圖及教育に關する統計表大坂府師範學校舍平面圖及説明論說欄

● 井上文學博士及二三大家の祝文、學術欄、教育學の基礎 高等師範學校助 松本孝次郎 ● 實験的教育 帝國大學講師 高橋孝次郎

● 父兄に對する教育者の責任 津見忠 ● 講義欄 ● 法制講義 高等師範學校助 田邊友三郎 ● 經濟學 法科大學 高橋孝次郎 ● 教授法講義 立病教授 高橋孝次郎

● 實験指導欄 ● 修身科教材の取扱に就て 高等師範學校助 田邊友三郎 ● 圖書科教授に就て 高等師範學校助 高橋孝次郎 ● 圖畫と手工 立病教授 高橋孝次郎

● 音樂教授上の注意 高等師範學校助 田邊友三郎 ● 教授欄 ● 修身科教授 高等師範學校助 高橋孝次郎 ● 綴り方教授 神田小學校助 高橋孝次郎

● 國史教授 和治 ● 理科教授 高等師範學校助 高橋孝次郎 ● 地理教案國民教科教授 土屋權 ● 算術教授 高橋孝次郎 ● 福

● 書き方教授 ● 島縣師範學校附屬小學校教案例 ● 小學校參觀記 ● 某師範學校教授研究記事 ● 大學叢談數件 ● 研究欄討議應答數件 ● 思潮拔翠 ● 時事、かさよせ、企望錄、小供心、議叙任辭令 ● 内外彙報、日誌、時評、漫錄、群童、日記、● 新年附錄寅年に因みて虎の童話資料 居士等 各欄共材料富豐趣味津津々

## 發行所

小石川白山御殿町百十四番地

## 教授法研究會

### 賣捌所

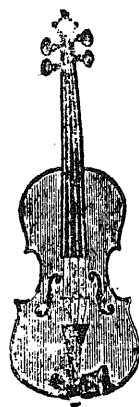
● 東京日本橋區本石町金昌堂 ● 京橋區鎗屋町東海堂 ● 神田區神保町

● 東京堂 ● 京橋區鎗屋町北降館 ● 神田區神保町上田屋書店

●洋琴 金參百圓以上貳千圓迄各種

●ウイオリン

鈴木製金五圓以上五拾圓迄各種  
 舶來品金八圓以上百五拾圓迄各種



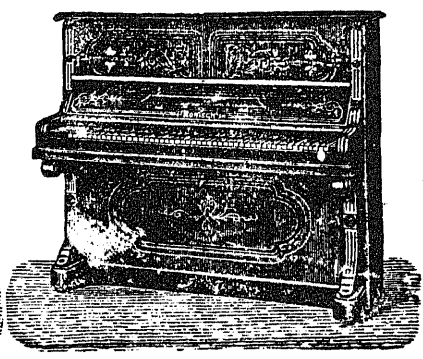
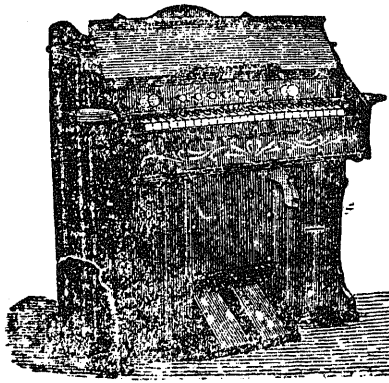
●手風琴

保險附  
**山葉風琴**

全一	全二	全三	全四	全五	全六	全七	全八	全九	全十	全十一	全十二	全十三	全十四	全十五	全十六	全十七	全十八	全十九	全二十
形	形	形	形	形	形	形	形	形	形	形	形	形	形	形	形	形	形	形	形
式場用新形	式場用新形	式場用新形	式場用新形	式場用新形	式場用新形	式場用新形	式場用新形	式場用新形	式場用新形	式場用新形	式場用新形	式場用新形	式場用新形	式場用新形	式場用新形	式場用新形	式場用新形	式場用新形	式場用新形
メーソンモ	メーソンモ	メーソンモ	メーソンモ	メーソンモ	メーソンモ	メーソンモ	メーソンモ	メーソンモ	メーソンモ	メーソンモ	メーソンモ	メーソンモ	メーソンモ	メーソンモ	メーソンモ	メーソンモ	メーソンモ	メーソンモ	メーソンモ
アル第一號	アル第一號	アル第一號	アル第一號	アル第一號	アル第一號	アル第一號	アル第一號	アル第一號	アル第一號	アル第一號	アル第一號	アル第一號	アル第一號	アル第一號	アル第一號	アル第一號	アル第一號	アル第一號	アル第一號
第二號	第二號	第二號	第二號	第二號	第二號	第二號	第二號	第二號	第二號	第二號	第二號	第二號	第二號	第二號	第二號	第二號	第二號	第二號	第二號
第三號	第三號	第三號	第三號	第三號	第三號	第三號	第三號	第三號	第三號	第三號	第三號	第三號	第三號	第三號	第三號	第三號	第三號	第三號	第三號
定價金百五十圓	定價金百五十圓	定價金百五十圓	定價金百五十圓	定價金百五十圓	定價金百五十圓	定價金百五十圓	定價金百五十圓	定價金百五十圓	定價金百五十圓	定價金百五十圓	定價金百五十圓	定價金百五十圓	定價金百五十圓	定價金百五十圓	定價金百五十圓	定價金百五十圓	定價金百五十圓	定價金百五十圓	定價金百五十圓
定價金百五十圓	定價金百五十圓	定價金百五十圓	定價金百五十圓	定價金百五十圓	定價金百五十圓	定價金百五十圓	定價金百五十圓	定價金百五十圓	定價金百五十圓	定價金百五十圓	定價金百五十圓	定價金百五十圓	定價金百五十圓	定價金百五十圓	定價金百五十圓	定價金百五十圓	定價金百五十圓	定價金百五十圓	定價金百五十圓

●右の外兩用風琴、吹奏琴、ハーモニカ、フラジヨール、ト、其他各樂器、并に和洋音樂書各樂器附屬品各種

明治三十四年二月六日內務省許可  
 明治三十四年一月廿八日第三種郵便物認可



新刊廣告

東京音樂學校編纂  
 ●中學唱歌 袖裝全一冊定價金三洋珍十五錢郵稅四錢

●重音唱歌 第一集 定價金五拾五錢 郵稅不要

●山田源一 第一集 定價金七拾五錢 郵稅不要

●美本 第一集 定價金五拾五錢 郵稅不要

●共益社 第一集 定價金五拾五錢 郵稅不要

●島崎赤太郎 全一冊 定價金四拾錢 郵稅不要

●形美本 一之卷 定價金三拾五錢 郵稅六錢

●鈴木米次郎 三之卷 定價金五拾錢 郵稅八錢

●石原重雄 定價金三拾錢 郵稅不要

●北村長 定價金三拾五錢 郵稅不要

●鈴木米次郎 定價金三拾五錢 郵稅不要

●舞踏案內附舞踏曲 定價金七拾五錢 郵稅不要

●ピヤノ調律修繕 定價金七拾五錢 郵稅不要

●御送附 目錄進呈

(ヨキ號略信電) 店器樂社商益共 番十川區東京  
 (番九廿百五橋新話電) 地三町竹京